×　　×　　×

彼はターナーなどの畫家の批評を以て滿足するものでなく、進んで彼一個の經濟學を樹立せんとした。彼はアダム・スミス以來自由主義經濟の大本營たるマンチエスターに赴き、自家の經濟說を講述した。彼の經濟說は一言すれば自由經濟學者の自由競爭の代りに、共働互助であつた。彼は孟子流の國家が老人を養ひ、保護者無き幼兒を育み、貧者を補助す可き義務あるを說いて、十九世紀の初期より英國を席卷したる自由放任主義に、眞向から反對した。彼の議論が當時に容れられなかつたのは當然である。然し彼は平氣でそれを遣り通した。彼は時としてはオックスフォードの學生を率ゐて、自からオックスフォードの道路の修繕に出掛けたこともある。又た自己の所藏品を割愛して、オックスフォード博物館の建立に貢獻したこともある。彼は蒸氣力の使用を好まず、彼の著作の如きは、殊更らに彼の門人をして出版所を作り、一切人工を以て之を仕上げしむることにした。何れにしても彼の文章は一種の風趣ありて、何とも云へぬ人を牽き附ける力があり、又た彼の詞想は泉の湧くが如く、殆んど無限際であつた。

×　　×　　×

これほどの彼であつても、一生彼は戀に敗れて、其の方面では全くの破產者であつた。第一は彼の山莊に彼の肖像を描かしむべく、畫家ミレースを招待した。其繪が成る頃には、ラスキン夫人とミレースとの間には、既に相愛の情が發生した。夫人が法廷に向つて、ラスキンが夫としての虐待を訴へた。ラスキンはそれに向つて何等の抗辯をなさなかつた。その爲めに彼女はラスキンを去つて、やがてミレースの夫人となり、凡そサー・ジョーン・ミレースの名畫のモデルに、彼女を描いたものが一再には止まらなかつた。晩年に近き頃、彼は又たある少女を愛した。少女も亦た必らずしも其心無きではなかつた。然し彼女は宗教の信仰に於て、ラスキンの信ずる所が彼女のそれと同一ならざるを知り、遂ひに之を拒絕した。

×　　×　　×

斯の如くにしてラスキンは、其の晩年は極めて寂寞に送つたが、然も彼は英國人よりは、彼の意見に贊成せざるまでも、彼に對しては少からざる同情と尊敬とを寄せられた。

ラスキンはカーライルに比すれば寧ろ女性的であつたが、然も彼も亦た熱血男子であり、反對者に對しては過激の言語を使用した。その爲めに米國の畫家にして日本の版畫の意匠を巧みに應用したるホイスラーは、ラスキンの批評が自家の面目を毀損するものとして訴へた。此の裁判は世間を騒がしたが、ラスキンの同情者は擧つて其の費用を寄附した。而して裁判官も亦たラスキンに向つて一錢の賠償金を申渡した。斯の如くにしてホイスラーは勝ちは勝つたが、世間の物笑ひとなつた。

(7) ワイルド其他

以上はヴイクトリア前期の話である。後期に至つては、上記の如き人は、之を見出さんとしても殆んど無かつた。固よりメレディス、ハーディなどゝいふ大家は存在してゐたが、彼等は寧ろ骨董的存在で、一世の風潮を支配したのは他に存した。ヴイクトリア朝の中期から其の末期に至れば、恰もスイフトのガリバー巡島記の巨人國から侏儒國に廻航したるが如き觀がある。氣の利いた、眼から鼻に抜ける如き作家は相當にあつたが、要するに何れも侏儒である。此中に於て美的生活を眞向に翳して出で來つたのがオスカ

ー・ワイルドであつた。ワイルドはラスキンから眞と善とを削除したる美の衣鉢を嗣ぎ、自から其の法門を開いた。彼の作を讀めば奇言警句口を衝いて出で、興味を牽くこと少くないが、要するに彼は輕薄才子の雄なるものとして、當時耽溺頽廢の氣分は彼によつて促進せられ、又た彼によつて代表せらるゝと云ふべきであらう。彼が同性不倫事件に煩はされて投獄せらるゝや、彼の人氣は一時に墜ちて、又た彼を顧みる者はなかつた。然し豈たゞ單り彼のみを咎めんやだ。彼をして其の羽を擴げしめたる世間も、亦た彼と共に其責を分つべきである。然るにワイルドのみを罪人として葬り去り、世間は口を拭うて知らぬ顔をしてゐるのは、餘計なことではあるが、此所が所謂る英國流の僞善的たる所以と見て差支あるまい。

× × ×

ワイルドと前後してベーターの如き文藝評論家も出で來つた。彼も亦た恐らくはラスキンの衣鉢を襲うたる一人であつたかも知れぬ。彼の文章は宛も磨きをかけたる珠玉を綴りたるものの如く、實に精妙を極めてゐる。然し彼も亦た英國の耽溺頽廢氣分に貢獻

したる一人として數ふべき者と云ふの外、他に云ふべきものはあるまい。政論的方面に於てはグリーンの如き者がある。彼の立場はミル、スペンサーなどと異にして、彼が一八八〇年オックスフォード大學で講義したる『政治的責任の本義』と題する一書の如きは、ある人は之を新カント派と云ひ、或人は之を新ヘーゲル派と云ふが、要するに其の本源は、プラトンの共和政治を祖述したるものに外ならぬであらう。然も彼の意見も唯だ學說として受取られたるまでで、何人も之を實行に移さんとする者はなかつた。若しありとせば僅かにトインビー等二、三の仲間に過ぎなかつた。

(8) ショーとウエルズ

現代に於て最も有名なる者はショーとウエルズであらう。バーナード・ショーはアイルランド人であり、アイルランド人は英吉利人を敵として歷史的の遺恨を持つてゐる者であるから、英吉利人に對して好意を持たぬは尤もである。英吉利人に對して好意を持たぬ作家が、英吉利人を指導することの出來ぬのは當然のことである。彼は唯だ皮肉を以て凡有る偶像を打壞してゐる。彼が一番始めに槍玉に上げたのはシエークスピーアであ

り、それよりも常に槍玉に上げつゝあるは大英國といふ偶像である。ウエルズは寧ろ國際派の文士にして、彼の科學的小說や豫言小說が、讀者に尠からざる暗示や諷諭を與ふることは否定することが出來ない。然し彼の著作に依つて、英國人が果して一グラムの愛國心を加へたりや否やといふことは疑問である。彼も亦た一個の偶像破壞者である。獨りキップリングは大英帝國を偶像として盛んに囃し立てたが、然も彼は印度に於ける英兵生活を主題とする小說に依つて、如何に英人が自儘勝手のことを印度で爲しつゝあるかといふことを無遠慮に暴露し、然もそれが當然であるかの如くに書き記し、かくて彼はチエンバレーンが政界で唱道したる帝國主義を文藝界に於て反應し、之が爲めに徒らに英國人の浮誇心を刺戟し、挑發したるに止まつて、英國人に向つて道義的觀念を寄與したなどといふことは、爪の垢ほどもなかつた。

(9) リットン・ストラッチエ

最後に我等はリットン・ストラッチエに就て一言する。散文家として彼ほどの筆力を持つてゐる者は、ヴイクトリア末期より現代に至るまで其の比類少いであらう。彼の『ヴ

イクトリア時代の偉人』は實に小冊子ではあるが、劃期的の著書である。彼はグラッドストーンでも、ナイチンゲールでも、ゴルドン將軍でも、乃至はマンニング大僧正でも、凡有る有名な人々を赤裸々に描き出し、今まで世間の傳說は全く妄想に依つて描き出されたるものであることを暴露した。然も其の暴露の法たるや極めて巧妙にして、褒するが如く、貶するが如く、讃美するが如く、冷笑するが如く、寸鐵人を殺す的の文字を以て、冷々淡々に敍し來る手際に至つては、誠に憎さほどの腕前である。然し彼も亦た偶像破壞者の一人であつて、凡そ現代の英國には英雄崇拜心などといふことは、全く跡を絕つに至つた。而してただそれに代るものは自己陶醉、享樂獨受に過ぎなかつた。所謂る昔ジョンソンが「愛國心とは橫著者の隱れ家」と云うた言葉があるが、彼は其時には一時の激語であつたらうが、今日では殆んどそれが實際となり來るまでに、英國の文學は英國人の思想や氣分を構成し來つた。卽ち英國の文學が英國の亡滅に貢獻すること如何に多大であつたかは、之を以ても知るに餘りあらむ。

自己陶醉の英國

如何に割引しても、英國人は世界大帝國を建成したるだけのものはあつて、偉大なる歷史を持つてゐる。然も彼等はそれに陶醉してゐる。卽ち偉大なる歷史は却つて英國人を麻痺せしめ、中毒せしめ、昏醉せしめ、遂ひには自壞作用を起す害毒となつてゐる。クロムウエルは「彈藥を乾燥せしめ、神に信賴せよ」というた。然るに現在の英國人は彈藥を乾燥せしむることを忘れてゐた。神に信賴するかせぬかは姑く措き、唯だ彼等は歷史に信賴してゐた。然も如何に偉大なる歷史も、荒怠放漫の英國人に取つては、何等の功德をも及ぼすことは出來なかつた。なるほど海にはアルマダあり、トラファルガルあり、陸にはブレンハイムあり、ウオタールーあり。然もこれ等の海陸に於ける歷史的大勝利は、何等の役にも立たない。今まは唯だダンケルクの歷史的大敗北が、世間の耳目に新たなるのみだ。

× × ×

凡そ科學的發明者としては、英人は唯一と云はざるまでも、其の歴史に於て第一を占めてゐる。ニュートンあり、ワットあり、ジョージ・スチヴンソンあり、近くはファラデー、ケルヴイン卿の如き、何れも學術の世界のみならず、其の發明を利用厚生に資したるもの誠に多大である。例へば今日世界の戰爭を一變せしめたといふ戰車の如きも、其の發明は英國より來てゐる。然も其の發明を最も利用したる者は英國人でなくしてソ聯及びドイツ人である。語を換へて云へば、英國人が之を發明して、其敵が之を利用するといふこととなつてゐる。英國の首相として世界大戰後に最も長期に亘りて政權を握り、且つ人氣の多かつたボールドウイン、即ち今日のボールドウイン伯爵は曾て曰く、

英國人は危機の時に、又た一旦緩急の時に役に立つ者である。彼は國難に處して泰然自若である。平和な時には無頓著の如く見える。先見の明もない。又た警告を聞いて其爲めに用心するやうにも見えぬ。何等準備もしないやうである。然し一度猛然として起つや、彼は死に抵るまで徹底せずんば止まない。其の活動に於ては遠慮もなく、容赦も無い。英國人は斯る天賦を持つて英國人として世に立ち、又た英國及び大英國

といふものを今日あらしめたものである。

と。之は一面事實であるかも知れない。我等も頭から之は間違つてゐるとは云はない。けれどもボールドウイン其人が之を以て自から誇りとなし、之を以て又た彼が指導せねばならぬところの英國人に向つて誇らしむるが如き語をなすは、誠に以て心得違ひと云はねばならぬ。所謂る英國をして一切の準備を怠り、一日の苟安に百年の災ひを釀すを打忘れて、空々寂々、世界第一次戰より第二次戰に至る約廿年の間を空過せしめたるその罪魁は誰である。少くともボールドウインの如きは、その主なる一人と云はねばならぬ。

× × ×

英國人は自から優越感に麻痺せられた。英國人はカンタベリー大僧正よりテームス河畔の仲仕に至るまで、皆な英國人たることを誇りとしてゐる。彼等は世界各國を股にかけても、自から優越國民として他の諸國民を蔑視してゐる。「ローマに入ればローマに從へ」と云ふ文字は英國人には一切無用である。彼等は如何なる場所に於ても、自分の流儀を持込んで行く。フランスの宣教師などは支那に行けば支那流の生活をなし、日本に

來れば日本流の生活をなすが、英國の宣教師はアフリカの眞中でも、アラビヤの砂漠でも、グリーンランドの氷雪の中でも、ヒマラヤ山の麓でも、或は太平洋の珊瑚礁でも、何處に行つても、英國流の生活をしてゐる。固より中にはローレンスがアラビヤ人の生活樣式を學びたるが如き、ブラントが埃及人と同一の生活を爲したるが如き類はあるが、それは全く好んで自國人の爲さざる所を爲したるまでにして、英國人は到る所で自分の流儀を振廻し、甚だしきは他に向つてそれを押賣りすることさへもある。されば英國人の不人氣、不人望は世界何れもみな然りであるが、英國人は決してそれを知らぬ譯ではない。知つて知つて知り拔いても、遮二無二それを遣り通すところに英國人の愉快もある。而して之がやがて英國破滅の甚となつてゐる。

此の優越感はやがては英國自滅の大いなる誘因となつて來た。例へば纖維工業は英國が世界第一といふのみでなく、殆んど專有してゐた。ランカシヤ州の紡績工業は世界第一の工業であるばかりでなく、世界の棉花は此處に消費せられ、世界の綿絲若しくは織布は此處より出づるものとせられてゐた。然るに何時の間にか英國から紡績機械を買受け

た日本では、やがて東洋地方に於て英國製造品を驅逐するのみならず、英國の本營マンチエスターまで之を持込むに至つた。流石の英國人も聊か狼狽せざるを得ず、其處で已むなく我が豐田式の紡織機械を購買して遲れ走せに防禦線を張り、それが思ふやうに行はれず、茲に始めてオツタワ會議を開き、植民地と英本國との間、卽ち英帝國內の自由貿易を以て、英帝國外の競爭者に向つて競爭すべく、關稅の重壁を築かんと企てた。一事が萬事其通りである。卽ち鐵と石炭とは英國が本家本元にして、英國の富强も實は之より來るものであつた。然るに鐵は北米合衆國とドイツに大なる競爭者が出で來り、英國は今や第三流に墜落した。石炭の如きも、生きるか死ぬるか、沈むか浮ぶか、乘るか反るかといふ今日に於てさへも、其の石炭の發掘が豫定の如くならず、其爲めに剛愎にして人に頭を低げることの出來ない首相チャーチルが、石炭坑夫に向つて泣言を並べ、之を拜み倒さんと努めてゐる。然し其の生產の豫想に及ばざる所以は、勞働者の素質の下りたるばかりでなく、其の勞働時間の不足と、其の機械類が舊式に屬したる爲めといふことである。

× × ×

何れにしても己惚れの自業自得は覿面にやつて來た。必然の結果で英人には研究心が缺乏してゐる。他人の長所に鈍感にして、偶ま之に氣附くも、勇み進んで之を學ばんとする勇猛心が無い。のみならず英人は懶惰である、勉强をしない。其の享樂氣分は同一でないが、何れも其の憂身を享樂にやつしてゐる。上流社會の週末休養の如き、若しくは勞働者の晝飯や、午後の茶の如き、或は競馬、或は狐狩、或は狩獵、或はクリケット、或はゴルフ、或はテニス、甚だしきは犬の競走まで、凡そ享樂に對して其の設備の周到に行屆きたること、英國の如きは古今無類と云つても差支あるまい。從つて彼等は汲々乎として他の長を採り、如何なる場合でも他に後れを取らぬやう、人が一度すれば己れは十度し、人が十度すれば己れは百度するといふ向上精進の精神は、全くとは云はぬが、殆んど缺乏してゐる。之も亦た英國人が自己陶醉より來りたる結果であらう。

×　×　×

英國人は自制することを知つてゐる。例へば飲みたい酒を控へることも知つてゐる。怒るべき場合に怒りを抑へることも知つてゐる。苦しき時に辛抱することも知つてゐる。然しながら彼等は一切反省を知らない。曾て或人がグラッドストーンを評して「彼には一切後悔がなかつた」と云うたが、これはグラッドストーン一人ではなく、恐らく三千幾百萬の英國人の九十九パーセントまでは皆なその通りであらう。彼等は他の惡事に就ては相當に敏感である。グラッドストーンの如きは、トルコ王を評して一大殺人者の稱號を與へてゐる。アルメニア人をトルコ人が虐殺したなどといふことに就ては、英國では屢々大問題となつてゐる。然しそれに十倍若しくは百倍する印度人に對する虐殺については、何人も聲を上ぐる者はない。彼等は彼等のなすところ悉く神の承認するところと信じてゐる。彼等は神の名に依つては、强盜を爲すことも、殺人を爲すことも、凡有る罪惡を犯すことも差支ないのみならず、當然のことと思つてゐる。彼等英國人は其の君主は惡を爲すこと能はずといふことが憲法の第一義と云ふが、君主ばかりでなく、英國人は惡を爲す能はずといふやうに、殆んど先天的に心得てゐる。

×　×　×

斯の如くにして彼等は阿片を支那に密賣し、若しくは押賣りし、而して支那の政府が

其の取締りを爲すや、忽ちそれを口實として支那に向つて戰爭を仕かけ、償金を取り、土地を割かしめて、平氣でゐる。まるで英國人は神と親類ででもあるかの如く心得てゐる。此の優越感が英國人をして世界の偉大なる民族たらしめたることもあらう。然も世界の偉大なる民族たる英國人をして、地獄の底に墜落せしむるに至らしめたる所以も、又た此の優越感であることに氣づかねばならぬ。如何なる偉大なる國民にせよ、一度反省を忘るれば忽ち墜落する。我等は其例を今日の英國に見るばかりでなく、古今の歷史に大帝國の興亡を閲する毎に、常に此感を深くするものである。

醉氣骨に徹す

凡そ人を叩きつけたる者は、又た其者より叩きつけらるゝことを覺悟せねばならぬ。報復は自然の理である。水でも之を堰止めれば、其の堤防の決潰することを覺悟せねばならぬ。況んや人類においてをや。然るに英國人は世界大戰に於てドイツを正面の敵とし、完膚無きまでに遣りつけて、それで英國人が之から枕を高くして安眠することが出

來ると考へたのは、餘りに己惚れすぎたるものと云はねばならぬ。支那人の諺に「楚三戸なりと雖も、秦を滅すものは必ず楚ならん」といふがある。それは秦が無殘に楚を滅ぼしたから、楚が必らず秦に向つて復讐するといふことである。果然其通りに秦は楚に滅ぼされた。

× × ×

ドイツをあれ程までに遣りつけて、而して英國が何等準備無くして、枕を高くして安眠することが出來るなどとは、常識多き英國人としては如何にも非常識の極みである。然し此の非常識が卽ち英國人に取つては常識である。英國人の常識では、英國人は天の選民であり、英國人の爲すところは必らず天の力が之を保護すると信じてゐる。之が卽ち英國人の常識である。ボールドウインでも、チエンバレーンでも皆な此の常識通りに働いたに過ぎない。我等の常識であれば、ドイツをあれほどまでに遣りつけた英國は、必らず遠からずドイツから何かの手段を以て其の仇を討たるるものと覺悟し、其の場合に處する道を十分に講じ、豫め報復せらるるに對する準備を爲しおくが、戰後第一の事で

あらねばならぬ。然るに英國人は自から毆られたる痛さは記憶するも、他人に與へたる痛さはこれを記憶せず、あれ程までもドイツを叩きつけて、然も之を容易に懷柔し得べきものと考へ、遂ひにロカルノ會議に於てドイツを國際聯盟に迎へ、之よりして天下泰平、國家安全と考へてゐた。

此時に於て英國は何事を爲したか。彼等が二十年間の歳月は、第一アメリカに對する債務輕減運動、第二與國であつた佛國が餘りに雄大となつて、英國傳統政策の勢力均衡を破るに至ることを防止する爲めの運動、第三日本が東亞で擡頭するのを抑へつくる運動。之よりもなほ重大なることは、內地に於ける對勞働者運動であつた。所謂る苦しい時の神頼みで、第一次世界戰爭に際しては、ロイド・ジョージが凡有る方便を以て勞働者を煽て上げ、泣き倒しや、拜み倒しや、凡有る手段を盡して彼等を働かしめた。かくの如くにして世界戰爭は、英國の勞働者をして一大驕兒の群たらしめた。彼等勞働者は遂ひに增長我慢底止する所を知らず、ここに所謂る一九二六年五月の全英國勞働者總罷業同盟なるものが出で來つた。此の罷業が若し成功したらんには、英國もまた共產黨の

支配下に置かるべき運命であつたが、幸ひに英國の民情はそれを是認する迄に赴かず、勞働者も彼等自から餘りに行き過ぎたることを自覺し、こゝに妥協が行はれて無事に解決した。然しその此處に至りたる所以は決して一日ではなかつた。餘りに勞働者に羽を擴げしめたる結果は、如何なる無理でも無態でも、勞働者の註文通りといふことに彼等は考へて、遂ひにこゝに至つたのである。

× × ×

英國は大戰後であれば、固より其の財政の豐裕であるべき筈はなかつた。然しながら英國は貧乏者を救濟するといふよりも、寧ろ勞働者に奉仕するといふ意味に於て、頗る多額の浪費をした。現に英國では二百萬に垂んとする失業者といふ珍客に、毎週六十シルリング宛の給料を與へて、彼等を衣食せしめた。所謂る鰥寡孤獨、助け無き者ではなく、其の肉身に於て何一つ不足なき立派な男が、國家の食客として毎週六十シルリングづつ俸給を受けて暮らすといふことは、之ほど割の好き商賣はないから、寧ろ彼等は何れかと云へば何時までも失業してをりたいと希望し、一人でも多く失業者の出で來らんこと

を喜んでゐたであらう。何れにしても之が英國財政の癌であつたことは、何人も否定は出來ない。而して事こゝに至らしめたのは、所謂る英國デモクラシーの必然の結果と云はねばならぬ。

話元に戻つて英國にも尙ほ二、三識者が無いでもなかつた。現首相チャーチルの如きは、世界大戰後幾もなく英國の軍備の忽にすべからざるを痛說し、ドイツの報復の恐るべきを切言してゐた。然れども英國の輿論は之を顧みず、所謂る狼來れりの叫び聲同樣、ただチャーチルの好事的惡戲に過ぎないと思うてゐた。チャーチルは曾てボールドウインが苟安政策を採ることを非難し、ドイツの空軍の恐るべきを力說して曰く、

今日に於て空中攻擊に對する效果的の防禦は、唯だ報復と反擊あるのみだ。然るに此點に於てはドイツが我々よりも大いなる有利の地を占めてゐる。彼等は自から彼等の空軍を防禦的であると云ふも、何れの國よりも、殊に我等が有するよりも最も多くの長距離爆擊機を有してゐる。且つ地理上に就て見るも、ドイツの境土よりロンドンまでの距離は、英國の海岸よりベルリンまでの距離に比すれば頗る近くある。卽ちドイ

ツの爆擊機は有效なる爆彈を搭載してロンドンに來ることが出來るが、我等の飛行機はベルリンに到達することは、全くないと云へぬが、極めて僅少である。斯く比較し來れば英獨二國の勝敗の數は明白と云はねばならぬ。

と。之は實に一九三五年三月十九日、議會に於ける彼の演說の一節である。されば如何に敵とは云へ、チャーチルだけは他の英國人に比して先見の明ありと云はねばならぬ。然しそれが實際に何程の效があつたかと云へば、何程も無かつたことは、チエンバレーンが第二次世界戰爭の破裂せんとする以前、二回までもミユンヘンに赴き、ヒトラー總統の膝下に跪いて、如何に平和を懇求したるかを見ても知ることが出來る。チエンバレーンは曰く、

如何に云うても其時には全く戰爭の準備がなかつた。そこで我等は如何なる代價を拂ふも、平和以外には何物も必要のものはなかつた。

と。又た當時の陸軍大臣ホーアベリシャは、殆んど同樣の意味を語つて曰く、

當時ロンドンに於て役に立つ高射砲は幾許も無かつた。

と。又たチャーチルも斯く云うてゐる、即ち、

若しヒトラーが一九四〇年の夏、英本土侵入の機會を捉へたならば、英國は如何に困つたかも知れない。其時には英本國には僅かに百臺の戰車と數百門の野砲あるのみ。然も其の若干は急遽博物館より持出したる大時代物であつた。然るにヒトラーが此の機會を逸したのは、誠に以て英國に取つて幸せであつた。

と。何れにしても如何に英國が無準備であるかといふことは、之で明白である。

× × ×

然るに英國人は此の無準備を却つて誇りとし、斯る無準備でありながらも忽ち陣容を建直し、戰爭中に準備を整へ、遂ひに最後の勝を制するのが英國人の本色などと云つて、怪我の功名に勿體を附けて自から誇りとすることは、これ實に度すべからざる自己陶醉漢と云はねばならぬ。世の中に己れの成功を誇ることは恕すべきも、失敗を誇りとしてそれを大なる手柄の如く觸れ廻るは、最早終生覺醒すべきの時期を失うたるものと言はねばならぬ。即ち醉氣骨に徹する者と云ふべきであらう。斯の如くにして今まや英國は

百計盡きて米國に無條件的に降伏を爲してゐる。英國は樞軸に叩頭する以前に、興國たる米國に叩頭してゐる。我等は英國の悲劇を悲しむよりも、先づ自から他山の石として之を實物教訓とし、深く自から警醒するところあらねばならぬ。（昭和十八年六月十四日）（完）

國民精神昂揚篇

神人合一の盛事

恭しく惟みるに、天皇陛下には大東亞戰爭の一周年に於て、伊勢に行幸あらせられ、神宮に御親拜あらせられた。聖旨宏遠、固より微臣等の其の萬一だも拜察し奉る能はざるところ、たゞ一億臣民と共に、世界の大變局に處して、大御心を勞し給ふ事實に、恐懼感激するのみである。

× × ×

北畠親房は神皇正統記の劈頭に於て、

「大日本は神國なり、天祖はじめて基をひらき、日神ながく統を傳へ給ふ。我國のみこのことあり、異朝にはそのたぐひなし。この故に神國といふなり。」

と特筆大書してゐる。我國の古典によれば、天神は日本を創造し給ひ、その創造し給うたる日本は、天神の後裔たる神孫が統治し給ふことに神勅を降し給うたとある。斯の如

く我等は神孫たる現人神にして萬世一系の　天皇を戴き、茲に古今東西に比類無き國體たる我が皇國の臣民である。我等の歡喜、我等の光榮、何物か之に加へんや。然も今上天皇の御聖德にして御勵精遊ばさるゝことは、歷代聖皇の中に於かせられても、其の類ひ多からずと申さねばならぬ。斯かる有難き御代に我等が生を享くることは、我等の祖先に對し、又た子孫に對し、寔とに申譯なき次第と云ふ可く、たゞ此上は、粉骨碎身、聖慮を奉戴し、聖旨に對揚し奉ることを期するの外は無い。

×　　×　　×

畏れながら現代我國に於て、最も多忙なる御方は、　今上天皇にまします。即ち廣く世界に於ても亦た然りと信ぜらるゝ。我國は神國にして、祭政一致は神代以後今日まで傳承せられ、歷代の　天皇は一面神孫として祖宗の神靈を奉祀し、一面　天皇として大御寶たる國民を綏撫し給ふ。今日に於ても宮中には皇靈殿あり、神嘉殿あり、內侍所あり、祖宗の神靈を奉齋し、神器を奉安し給ふ。即ち天下事あれば先づ祖宗の神靈に告げてその加護を祈らせ給ひ、事終れば更らに之を告げて奉謝の賦を效し給ふ。即ち今回の

神宮御參拜の如きも、亦た斯の如き聖慮によつて行はせ給ひじものならむ。之を國史の文獻に徵して、當さに其の然る可きを信ずるものである。

×　　×　　×

蒙古襲來の時に際しては、龜山上皇は躬をもつて國難に代らんと祈らせ給うた。癸丑甲寅以來、國家多事に際して、孝明天皇は寢食を安んじ給はず、鷄鳴には御床を起たせられ、盥漱して神明に祈願し給うた。草莽の一書生にして維新回天偉業の殊勳者の一人たる吉田松陰の如きも、この御盛事を仄聞して、愈よ身をもつて國に許すの決心を大且つ强ならしめた。而して　明治天皇に於かせられては、孝明天皇の遺猷を繼がせ給ひ、殊に敬神の一事に於ては最も篤くあらせられ、「わがよを守れ伊勢の大神」と詠じ給うたほどである。日露戰爭の終局に於ても、伊勢の神宮に御親拜あらせられたことは、なほ我等の記憶に新たなる所である。而して明治卅八年十月十六日、帝國海軍人に告げ給うたる勅語に於ても、「朕ハ汝等ノ忠誠勇武ニ賴リ出師ノ目的ヲ達シ上ハ祖宗ニ對シ下ハ億兆ニ臨ミ天職ヲ盡スコトヲ得タルヲ懌ヒ」と宣うた。即ち　今上天皇に於かせられても

昭和十六年十二月八日、宣戰の詔書に「皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ朕ハ汝有衆ノ忠誠勇武ニ信倚シ祖宗ノ遺業ヲ恢弘シ速ニ禍根ヲ芟除シテ東亞永遠ノ平和ヲ確立シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス」と仰せられた。卽ち萬世一系の　天皇は、上には皇祖皇宗あり、下には億兆衆庶あり、斯の如くにして祭政一致の實は、國史有つて以來儼乎として今まに存してゐる。

× × ×

古人は人事を盡して天命を待つと言うたが、我が國體に於ては、徒らに管だに天命を待つばかりでなく、祖宗の神靈に向つてその加護冥助を悃祈熱禱し給ふ。單り至尊のみならず、至尊の赤子たる我等臣民も、亦た聖旨を體して齊しく神明の加護冥助を悃祈熱禱す。是れ我が國體の萬國に隔絕する所以。卽ち皇室を中心として倫理的國家を作したる我が日本は、之を空間的に見れば八紘爲宇であり、之を時間的に見れば天壤無窮である。我等が今日の戰爭は、管だに現在の日本國民を擧げての戰ひでなく、開闢以來我等祖先の神靈と共に戰ふもので、日本人の死生觀は、生きては勤皇の忠臣となり、死して

は護國の神靈と作る、所謂る藤田東湖の極天皇基を護るとは此事である。

× × ×

最近我が興國獨逸のゲッベルス宣傳相は、我が獨逸在留の記者に向ひ、「獨逸國民は新聞により日本將兵の英雄的行動を知り、共通的感情を呼び起してゐるが、日本では皇室に對する絕對忠誠の觀念と愛國心とが固く結びついてゐる。これは日本の大きな特徵であり、遺憾ながら獨逸國民が眞似の出來ないところである」と明言した。凡そ世界に於て民族的矜持と祖國的自尊心の熱烈なる、未だ獨逸人を凌ぐものは無い。然るに我が國體に對しては、ゲッベルス宣傳相をして此言を作さしめたる所以は、彼がよく日本の日本たる所以を了解したるものにして、海外に於て一の知己を得たるものと云はねばならぬ。我等は茲に謹んで至尊神宮御參拜の盛事に際し、區々の微衷を披瀝して、永く此の國體を擁護するのみならず、之を發揚し、之を擴大し、彌々東亞聖戰の目的を完遂する最善の努力を效さねばならぬ。

山本五十六死せず

將星天より墜つ。世界何人も吃驚せぬものはあるまい。意外と云へば眞に大意外だ。

山本聯合艦隊司令長官は、實に昭和十六年十二月八日、米英に對する宣戰大詔の渙發以來、我が陸、海、空の一切を擧げて、殊勳者中の殊勳者であつた。其の世界を驚殺した る眞珠灣襲擊以來、其の作戰は、愈よ出でて愈よ妙、其の豐功偉勳は、世界古今海戰史上に比倫を見ない。是れ上に　大元帥陛下の御稜威を畏み奉り、下に將兵の忠勇に賴るも、其の首腦者は、卽ち山本五十六その人であつた。山本五十六は、實に大東亞戰爭に於ける第一の英雄と云ふも過當でない。

×　×　×

今まや彼は不幸にして、戰死す。然も其の戰死や、諸葛孔明の秋風五丈原でもなく、楠公の湊河でもない。强ひて例を求むれば、ネルソンのトラフアルガル役の戰死だ。卽

ち死を以て勝利を獲得した。然も彼は單に獲得したるばかりでなく、我等は山本五十六その人が、永く日本の一大軍神となりて、わが皇威を太平洋の全面に擁護するの新たなる任務に就くものたることを確信する。

×　×　×

山本司令長官は鬪志滿々、渾身皆膽、しかして機略縱橫、智謀泉の如く、然もこれを一貫するに日本精神をもつてす。彼の先人山本帶刀は壯年にして、實に北越の軍に河井繼之助と與に力戰苦鬪、刀折れ丸盡きて遂ひに屈せずして從容死についた。彼れ山本五十六の死は、その先人の死に比すれば、更らに千百倍の光輝あり、同時に效果ある死であつた。死して彼が如き、其の死所を得たりと云ふ可きだ。

×　×　×

我が皇國の海軍には、多士濟々、一の山本五十六を喪ふも、更らに幾多の山本五十六がある。我等は決して後繼者無きに苦しまない。凡そ人間の一生に、山本五十六ほど斯かる短時間に、斯かる大戰功を遂げたる者はない。此點より見れば、彼は今まや死して

悔なきもの。彼や現界の舞臺を他に讓りて、自から幽界の鬼雄となり、軍神となり、我が皇國の爲めに、太平洋上—印度洋も勿論—の守護神たるも、彼に於ては決して不足の役割ではあるまい。況んや彼は特恩を以て、元帥府に列せられ、金鵄勳章功一級に敍せられ、國葬を賜うたるに於てをや。若し今日我が皇民の一人たりとも、彼の死を悲しんで失望落膽するが如き者あらば、これ決して彼の雄魂毅魄を慰する所以ではない。若し彼に對して中心より敬弔の情を表せんとせば、我等は更らに一層の戰鬪的精神を熾烈ならしめ、以て米英撃滅に向つて、進一歩の道を效さねばならぬ。

× × ×

山本五十六は人間として死せり。然も軍神としては生きてゐる。楠公の生きてゐる如く、東郷元帥の生きてゐる如く生きてゐる。彼の英靈は決して海底に葬らる可きものではない。いざ我等は新たなる聯合艦隊司令長官古賀峯一大將の下に、新局面の展開を見む。(昭和十八年五月廿一日)

米英撃滅二詩

休説時宗與秀吉。　降魔神劍掃妖氛。
皇民一億皆忠勇。　撃滅米英酬聖君。

蹂躙大東恣慾私。　皇天震怒不須疑。
振焉十億同仇士。　撃滅米英在此時。

大詔奉戴の過去、現在、未來

◇世界史上の新紀元

紀元二千六百一年十二月八日、米英に對する宣戰の大詔は、實に宇宙大變局を指點する道標にして、世界史上の新紀元は、正さに此時より開かれたりといはねばならぬ。我等一億國民の此際の心境は、恐らくは國史の上古に溯つて、天の安河に會したる八百萬の神達が、天の岩戸が開かれて、天神の御光を拜したと、殆んど同一であらうと思ふ。

當時予は

天書宣レ戰疾如レ雷。　億兆驩呼顏色開。
驕米猾英肝膽落。　蹴レ雲破レ浪神兵來。

と恭しく賦して、感戴驚喜の情を陳べた。詞高雅を缺くも、恐らくは一億國民の意中を

遺破したものであらう。

◇わが義戰、聖戰

最近、野村、來栖兩大使及びロバーツ調査書の語るところに徵するも、我等が大詔渙發以前より繰返し陳述したるところに、悉く裏書きしたるものである。今回の戰爭は全く我に取つては、正當防禦の戰爭であり、彼より强要せられたる戰爭であり、其の義戰たるばかりでなく、延いて東亞十億人類の疾苦を醫し、桎梏より解放するの聖戰たることは、最早や議論の餘地は無い。

我等は實に潔白なる良心を以て、我が一億の同胞と共に、此の義且つ聖なる戰爭の爲めに、一切を犧牲として、その完遂を期せねばならぬ。

◇米國の利己主義

今次の世界大戰爭が、米國大統領ルーズヴエルトの世界制覇の野望より發胎し來りた

ることは、最近もムッソリーニ首相の喝破したところにして、何人もこれに異論はあるまい。特に奇怪なるは米國である。彼等は九十年前、四隻の軍艦と大砲とを以て我に開國を强要し、然も開國の必然なる結論として來たしたる我が日本の發達を、今日に於ては徹底的に妨害し、我に向つて又た鎖國を强要しつゝある。

昨年十一月二十六日ワシントン政府が、野村、來栖兩大使に向つて我に提案したるものは、卽ち日本をして六尺の壯年を、再び三尺の童子に逆行せしめんとするものに外ならない。卽ち我に開國を强要したるも、自國の便宜であり。我に鎖國を强要したるも、自國の便宜である。米國は徹頭徹尾利己主義の國である。

斯かる場合に於て、宣戰の大詔の渙發せられたるは、寔とに人天感應其時を得たるものと云はねばならぬ。

◇一年間のわが戰果

此の如くにして一年は經過した。此の一年は地球の回轉より見れば、三百六十五日に

過ぎざるも、歷史上より推步すれば、百年の歲月を經るも、此の如き事を期待し難き一大驚異である。

アングロ・サクソン人が幾百年を費し、東亞に根據を作りたる香港、フイリッピン、ビルマ、マライ、スマトラ、ジャワ、ボルネオ、セレベス、其他太平洋の諸群嶼は、悉く皇軍の占有するところとなり。卽ち佛印に於ても、タイ國に於ても亦た我が共榮圈に加入し、アングロ・サクソンの勢力を驅逐し去つた。

要するに半年ならずして、東亞に於ける彼等の根據を覆へし、一年ならずして其の秩序は回復せられ、軍政の規模は略ぼ其緒に就くに至つた。此の如き大事業を、此の如き短日月の間に成就したることは、歷史上唯一無比と云はざるも、殆んどそれに幾しと云はねばならぬ。我等は此の機會に於て、御稜威の有難さと、我が皇軍の忠勇とに對し、恐懼感激の情を新たにするものである。

◇國內思想の良化

大東亞戰爭は一年間に世界の地圖を一變せしめたばかりでなく、また我が國內をして戰時體制を完成せしめんとしつゝある。卽ち東亞よりアングロ・サクソンの勢力を一掃すると同時に、我が皇國よりアングロ・サクソンの思想及び其の思想に依つて發現した凡有る事相を正さに一掃しつゝある。

聖詔降下以前百年に幾き英米の因襲は、我が國民の思想と生活とを殆んど支配せんとした。而して個人主義、自由主義、利己主義、非國家主義、非愛國主義、唯物主義、享樂主義の橫行に一任し去つたものが、最近の一年間に、幸ひ東條內閣が勇猛心を以て、是等の惡思想、惡習慣、惡行爲を滅絕せしむ可く努力したる效果は、極めて著明なるものがある。

卽ち我等は大詔奉戴と同時に、我等自から精神的に日本人として蘇生し來つた。これは戰爭の效果程世界の耳目に赫灼たらざるも、國運の進行に就いては、それに相ひ匹ず可き大なる效果を贏ち得たと云はねばならぬ。要するに昨年以來我が日本は、總てに於て初めて日本らしき日本となつた。

◇前途の大光明

最近數百年間、世界の大勢は、西力東漸し。其の東漸の急先鋒として、アングロ・サクソン人が東洋に其の地步を占め來つた。然るにルーズヴエルトが我に向つて叩頭的、屈辱的條件を强要し、其の結果遂ひに我をして國運を賭して起たしむるに至つた。其爲め從來の西力東漸の大勢は一變し、玆に世界史上に東力西漸の新紀元を開いた。

所謂る狂瀾を旣に倒るゝに廻らすとは此事である。東力と云ふは未だ十分の意味を盡さない。所謂る『光は東より』の言葉に倣ひ、『東光西照』と云ふ可きであらう。而して其の大運動の根幹となり、樞軸となるは、實に我が皇國である。我が皇國の將來に於ける責任の重且つ大を思へば、我等は過去一年間の赫々たる大成功を以て、自から滿足す可きものではない。前途は遠し。前途は難し。前途は有望だ。前途には大光明が待つてゐる。

◇怖れず侮らず

凡そ敵を怖るゝは卑怯であり、敵を侮るは愚蒙である。我等は怖れず、侮らず、更らに此の機會に於いて我が鬪志を新たにして、能く敵を知り、克く敵に當らねばならぬ。元來アングロ・サクソン人の特色は、粘り强きにあり、執拗なるにあり、屈托せざるにあり、持久にある。出足は鈍きも、持ちこらへる力は强い。

古人は『朝氣は鋭、暮氣は歸』と云つたが、アングロ・サクソン人は、朝氣は朦朧にして、暮氣は新醒と云ふ可きに幾し。然も彼等は又た敵に學ぶことを知つてゐる。日本は最近一年間に、彼等に如何にして敵に勝つ可きかの途を、山程敎へた。彼等は悉くこれを學得せざる迄も、尠くとも其の若干を學得したるに相違ない。されば我等は今後に於いては、我が彼に加へたるところを以て、彼が我に加ふ可きことを、よく覺悟せねばならぬ。

蔣介石軍は決して明治二十七、八年戰役の支那兵ではない。卽ち英米の陸海空軍も亦

た今後に於いては、相當の變化と進歩とを見る可きは當然である。

我等は勝ち易きに勝つばかりでなく、勝ち難きに勝たねばならぬ。奇襲を以て勝を制するは我が得意であるも、正々堂々、正面の戰鬪に於いても更らに又た勝を制せねばならぬ。要するに今後の戰爭は桶狹間で無く、賤ヶ岳で無く、信長長篠の軍法を以て、彼に當らねばならぬ。

◇質と量と

質と量とは戰鬪の二大要素。彼等は量を恃んで質を忘却した。彼等の豫算には、日本精神や、日本魂を計上しなかつた。其の爲めに彼等は一年間に於いて、此の如き大失敗を招いた。然も彼等は今後に於いて、彼等が誇りとする量を、益々增殖するばかりでなく、其質に於いても修錬することある可きを認めねばならぬ。

固より其質たるや、我が日本精神、我が日本魂と比較す可きものでない。然も彼等には彼等相應に英米精神、英米魂あることを認めねばならぬ。ルーズヴエルトは曾つて、

本年は飛行機六萬臺、商船八百萬噸を新造し。翌年は更らにそれに倍すると豪言しつゝある。彼等は自から自由主義の爲めに闘ふと云ひつゝ、今日は其の自由主義を清算して、殆んど我等と同樣の戰時體制を國内に布きつゝある。されば彼等が誇稱する程で無きにせよ、量に於いても更らに增殖す可きは豫期せねばならぬ。況んや新たに其質を加ふるに於いてをや。

◇精神錬成の要務

而して彼等は今日の戰爭を我等に向つて强要したるに拘らず、尙ほ自國人民と第三者とに向つては、生きるか、死ぬるか、喰ふか、喰はれるか、絶體絶命の決戰であると豪言して、其の人心を鼓舞しつつある。我が當局が今日增產第一を提唱し、凡有る手段、凡有る方法を以て、其の强化を指導しつつあるのは、彼の量に對抗する所以。然も我等は更らに質を錬成して彼等の質に當らねばならぬ。別言すれば日本魂を錬成して、彼等の錬成せんとしつゝある米國魂や英國魂を壓倒せねばならぬ。

今日の錬成は決して國民の體育ばかりではない。精神の錬成であらねばならぬ。精魂の錬成であらねばならぬ。如何に戰時體制が出で來たつても、それを運用す可き魂が入らざるに於いては、所謂る佛作つて魂無きと同樣である。されば我々は今後に於いては、此の戰時體制を運用するに足るだけの、所謂る日本魂、日本精神を研精錬磨して、以て時務の急に應ぜねばならぬ。

◇長期戰的性格

我等が好むにせよ、好まざるにせよ、戰爭が長期戰に入ることは、今更ら申す迄もない。第一、今回の戰爭の目的其物が、長期戰たる可き性質を有してゐる。第二、相手のアングロ・サクソン人が其の傾向を最も多量に有つてゐる。第三、現代の戰爭が又た長期戰たる可き複雜性を帶びて來た。

從來我國に於いては、年月の長きに拘らず、其の結果に於いては殆んど元の木阿彌であつた征韓役さへ前後七ヶ年を經た。蒙古襲來の大事件は、其の前後を通じ、發端より

其の結尾に至る迄殆んど五十年に幾きものがあつた。即ち現代の戰爭の如きは、從來の所謂る一戰にして天下を定むるが如きことは、容易に期し難き狀態である。

今日の戰爭は其の主力を空軍に置く。而して飛行機の製作は戰鬪艦を製造するが如く三五年を要せず、即時に之を製造することを得、然も其の運動は迅速輕快。玆を以て朝に百臺を失へば、夕に百臺を新造する程容易ならざるも、稍々それに幾きものがある。

◇爭地は航空基地

されば今日に於いて一の關ヶ原や、一のトラフアルガーや、一の赤壁や、一のワーテルローを以て成敗を一擧に決するが如きことを期待することは出來ぬ。寧ろ今日の戰爭は、幾多の關ヶ原や、幾多のトラフアルガーや、幾多の赤壁や、幾多のワーテルローが連續的に出で來たるものと覺悟せねばならぬ。

今日の戰爭は陸より水に及び、水より空に及び、空より更らに陸に及ぶ。去ぬる八月以來今日に至る迄、ソロモン群島に於ける三回の海戰、及び其の中間に加はる南太平洋

海戰の如きは、要するに蒼海の一粟とも云ふ可き、眇乎たる群嶼を爭奪するものだ。群嶼そのものを日米兩國全力を盡して相爭ふ、これ所謂る兵家の爭地なるが爲だ。これは別儀でもなく、只だ航空基地たるが爲である。

これ程迄にも航空基地が、現代の戰爭に主要なる働きを爲すを見れば、其の效果が戰爭そのものに如何なる影響を來たすかは、多言を俟たない。

× × ×

第四、今日の戰爭は、兵士と兵士との戰爭でなく、國と國との總力戰である。故に兵士を失つたりとて、其儘戰爭が終結す可き理由は無い。苟くも物的資源と人的資源の繼續せん限りは、戰爭も亦た繼續す可き必然の理由がある。

以上の理由に依つて、我等は長期戰を覺悟せねばならぬ。而してこれに對應するの途を講じ、我等の最善を致すが、我等の今後の任務である。

◇列強の首領

今日の世界列强を見れば、何れも彼等は其國に適當なる適材を擧げて、其の統率者たらしめてゐる。我が興國たる獨逸のヒットラー總統の如き、伊太利のムッソリーニ首相の如き、其の出處は必らずしも一ならざるも、何れも各個の流儀に於いて、自から運命を開拓し、同時に自國の運命を開拓したる一大雄である。卽ちソ聯のスターリン委員長の如きも亦たこれ一個の怪傑にして、善かれ惡かれ、ソ聯の民衆を統御してゐる。

我が敵國たる英國首相チャーチルの如きは、英國貴族の子を父とし、米國成金の女を母とし、英米の血潮が其の血管に流れてゐる。彼は固より大なる背景を負つて出で來りたるも、彼自身は好んで逆境を選び、遂ひに自力を以て今日の地位を贏ち得た。彼の辯は其過を飾るに足り、智慧は其醜を掩ふに足り、勇は其非を遂ぐるに足る。彼は辯論の士であるも、決して一個の風袋子ではない。彼は多能多才、嚮ふ所として可ならざるはない。然も傲岸不屈、鋼鐵の脊椎骨と、鑄鐵の額とを有す。

卽ちルーズヴエルトに至りては、遠くユダヤ人の血液を受けたる和蘭人の裔にして、固より純乎たるアングロ・サクソン人ではない。其の老獪にして狡智に富む、優に一億

五千萬の米人を統御して餘り有るの才略を持つてゐる。彼が國祖ワシントン以來の慣例を破り、三度迄大統領の職を延長したる所以は、全く彼が世界的野心を滿足せしめんとするの方便に外ならない。

◇米國大統領の野心

彼（ルーズヴエルト）は初より日本の敵ではなかつた。曾つて海軍次官として、佛國の記者ローザンに向ひ、

太平洋は日米兩國を容るゝに餘りあり。兩國の間に戰鬪を來たすが如きことは必無の事なり。

と云ひ。又た我國の一外交官に向つて、

英國は常に日本と米國とを喧嘩せしめて、漁父の利を占めんとす。我等は互ひに相ひ戒めて、其策に乘つてはならぬ。

と云つた。然るに今日に於いては、餘りに氣が進まざる英國さへも引摺つて、遂ひに英

米對日本の戰爭を挑發したるは何故である乎。チャーチルは曾つて『歐洲の戰爭は間も無く片付くに相違ない。然る場合には我等は米國を援けて、最後の敵たる日本に一大打擊を加ふ可きである』と云つたが、豈圖らんや、ルーズヴエルトは寧ろ英帝國の亡滅を奇貨とし、其の遺產たるカナダ、濠洲、印度、南阿等を、悉く手に入れんと心掛けてゐる。彼は實に英國にとつては油斷のならぬ味方にして、所謂る送り狼の類に外ならない。但だ其の邪魔者が日本である。米國の世界制覇の野心の前に横たはつてゐるは、日本と獨逸にして、然も當面の敵は日本である。

茲を以て彼は今日、專ら日本に向つて其の主力を加へんとしつつある。我等は今ま此の如き敵を有してゐる。我等は彼を怖れもしない。侮りもしない。彼は米國人に向つて日本を不倶戴天の仇敵と言ひくるめ、盛んに日本に對する敵愾心を挑發しつゝある。我等は自から知ると同時に能く敵を知つて、彼の眞相を此に告白、更らに彼等に對する擊滅の戰爭を進むる新階段に躍入す可きである。

◇內閣を動搖せしむる勿れ

我等一億の國民が、今後努む可きは、戰時體制に日本精神を打込み、如何なる場合に於いても、皇國をして不敗の位地を占め、如何なる場合たりとも、足許より鳥が立つが如き懸念なからしめねばならぬ。それに就いて我等が今ま此に指點する第一は、內閣の鞏固にして、容易に動搖せず、又た動搖せしめざることである。英人は人材乏しとは云へ、敗戰より敗戰に續くチャーチル內閣を支持して、尙ほ爲す所あらんことを期待してゐる。何れの强國も敵味方に限らず、其の內閣は鞏固である。永續してゐる。然るに最近我國の內閣は、佛國を除けば、世界の內閣に其比なき短命內閣であつた。我等は今日の東條內閣を必らずしも最善の內閣と信じてゐない。然も最近數次の內閣に比すれば、能く諮り、能く斷じ、能く行ひ、進んで自から責任を執ることを辭せざるものあるを、無視することは出來ぬ。

若し萬一此際政權の爭奪などを夢見る者あらば、敵國には餘計の力を假し、與國には

肇からざる不安を與へ、更らに國民に向つても亦た其の懼ふ所に遲疑せしむる所以となる。若し萬一此の如き者あらば、我等は之を賣國的行動と云ふを憚らない。故に我等は强固なる內閣を支持し、且つ內閣を支持して鞏固ならしむることが聖戰完遂の第一義であると信ずる。

◇吏道の刷新

第二は吏道の刷新である。政黨政治は舞臺の上に於いて其の橫暴を逞しくし、官僚政治は舞臺の裏にて、其の慾望を逞しくす。これが從來の仕來りであつた。今まや政黨は消解して、政黨政治の弊は息み、同時に官僚政治も亦た東條內閣に於いて、屢〻刷新の實を擧げんとしつゝある。然もこれは容易の事では無い。官吏の割據對立は痼疾にして、殆んど事務の擧行を不可能ならしめんとしつゝあつた。今日東條內閣が官廳の簡素化を高調するのは、寔とに嘉みす可し。然も其憂は一朝一夕ではない。而して最も大なる官界の憂ひは、官吏が責任を回避する事である。

責任回避の罪は、從來の首相及び國務大臣、高官大僚が、主としてこれに當らねばならぬ。彼等は難きを見れば進んでこれを排開するを努めず、平家の首將が水禽の羽音を聞いて逃げ去る如く逃げ去つた。卽ち今まや責任回避は、下は判任以下の一小官吏にまで徹底し來つた觀がある。故に官吏をして責任を帶び、責任を解し、責任を行ふに至らしめずんば、此の刷新はとても空題目に終らんも未だ知る可からず。

抑〻官吏とは君國の政務を擧行するを職責とするものである。彼等は卽ち其の意味に於いて國民の指導者たる位置を占むるものである。位地の高低に拘らず、其の責任は重大である。此の如くにして我等は此の責任觀念が、官吏に徹底することを、實に今日の急務と思ふ。

◇官吏の廉恥心と人心の統一

第三に官吏の廉恥心を養成する事だ。世人は自由主義や利己主義が民間の政黨を禍したと云ふが、官吏も亦た同樣であり、局部に就いて云へば更らに甚だしきものがある。

彼等は一身を犠牲として國家に奉仕す可き身分でありながら、其の地位を濫用し、惡用し、自から利權に接近し、往々瀆職の罪を犯し、假令法律上、其罪とならざるも、事實は更らにこれより甚だしきものがある。吏道刷新に於いては、官吏の廉恥心を醒覺し、長養することが何よりの急務である。

× × ×

第四に、長期戰には東亞共榮圏内の物資の交流、資源の開發は固より必須のものである。然もそれよりも重要なるは東亞共榮圏内の人心を統一し、其の人心を打つて一丸と爲し、我が皇國を中心として、總ての共榮圏内の國土民人が日本に信頼し、日本に心服し、日本を指導者として、其の指揮號令に悅服せしむるに至らずんば、決して日本は不敗の地位を占めたりと云ふことが出來ない。

今日、生産增殖は一大急務であり、万事を差措いても、此の急務を遂行するは、當然の事である。然も其の生産增殖さへも、基づくところは人心の歸向である。若し人心を失はんか、如何なる手段、如何なる方法を廻らすも、到底我等の所期を達すること、出

來ぬ。

◇敗北思想の撲滅

第五に更らに考慮す可きは、今ま尙ほ民間に殘存する英米崇拜の思想である。官界に於ける自由主義、個人主義は、遂ひに官僚政治の弊を來たさしめた。況んや民間に於けるそれに於いてをやだ。我等は今ま尙ほ妥協思想の細菌が何處に潛伏する乎、敗北思想の毒藥が何處に潛在する乎、我等は敵に對して防諜を忽にせざるのみならず、我が獅子身中の蟲に對して、細心の警戒を要す。

所謂る油斷大敵とは此事である。苟くも我等が日本精神を作興し、日本魂を警醒し、依つて以て一億の同胞打つて一丸とならば、假令此の戰爭が百年繼續するも、決して心配には及ばない。我等の日本精神とは、君國の爲には火に入り、水に入る精神である。我等の日本魂とは、君國の爲ならば、一切を犠牲として奉仕するところの忠魂である。

（昭和十七年十二月四日）（完）

大東亞戰開始第二の新年を迎へて

（第一）君臣父子の恩愛

新年を迎へて、恭しく　大元帥陛下の御乾德彌々崇きを仰ぎ奉り。陸海將兵の忠勇奮鬪に感謝し、我等一億臣民各自の持場に於いて、戰場に在る覺悟を以て、最善の努力を效さんことを誓ふ。

×　　×　　×

今日は何は扨て措き、勝つて勝つて、勝ち拔くことを急務とせねばならぬ。然も今回の戰爭は、物的の戰爭ばかりでなく、又た靈的の戰爭にして、當然我等の子、若しくは孫にまで繼續せらる可きことを覺悟せねばならぬ。

されば我等は、我等自身が勝ち拔くばかりでなく、我等の子にも、我等の孫にも、我

等同樣勝ち拔くだけの訓育と、敎養と、鍛錬とを授けねばならぬ。玆に我等の義務は、一時的のものでなく、永久的のものであることが明白である。

×　　×　　×

我が陸海將士が、世界無二の强兵であり、且つ精兵であることは、世界の通論だ。而して其の理由は多端であるも、詮ずるところは、我が國體の精華を發揮しつつあるからである。我等の將士には、何れも和氣淸麻呂や、楠木正成や、菊池武時や、若しくは藤田東湖や、吉田松陰や、近くは乃木大將の血が通つてゐる。我が將兵の死するや、何れも　天皇陛下萬歲を絶叫して逝く。故に我等の務めは、此の滴々相承くる傳統的忠君愛國の精神を、子孫百代に傳へ、更らに之を時局の擴大と、困難と、重加とに相應じて、對揚することである。

×　　×　　×

如上の點に就ては、世論皆な同一である。當局者も亦た之を以て我が國民を指導しつつある。但だ我等は此の場合に、卽ち會澤安が「今日仰ぎ奉る至尊は、天照大神と同體

に在ます」と云つた如く、現神たる　天皇を絶對無比の君主として崇敬し奉るばかりでなく、又た民の父母として、一億皇民を治めしめ給ふ家族的國家の父母として、滿腔の敬愛を捧げねばならぬ。雄略天皇が「君臣は義にして、情は乃ち父子」と宣ひしが如く。又たは淳仁天皇が「六合に母臨し、兆民を子育す」と宣ひしが如く、此の方面に就て、深く思を效さねばならぬ。

凡そ理念は思想の根柢を爲すものであるも、理念が直ちに活動に移る可きものではない。更らに感情の熱火が加りて、而して後に初めて火にも入り、水にも入る活動となる。而して其の感情は、乃ち我等が至尊を、我等の大なる父母として愛敬し奉るより來る。

× × ×

明治天皇は夙に此事に就き、宸慮を勞じ給ひ、明治元年三月十四日の御宸翰にも、

往昔列祖萬機ヲ親ラシ、不臣ノモノアレバ、自ラ將トシテコレヲ征シ給ヒ、朝廷ノ政總ベテ簡易ニシテ、如此尊重ナラザルユエ、君臣相親シミテ、上下相愛シ、德澤天下

ニ洽ク、國威海外ニ燿キシナリ。

と仰せられてゐる。即ち明治天皇の御巡幸に際し、沿道の庶民が子來して之を奉迎したる光景は、御巡幸の記錄を見れば明白にして。天皇も亦た深く之を嘉みし給ひたる御有樣が、歴々として傳へられてゐる。

而して維新の元勳、西郷、木戸、大久保の如き、又た三條、岩倉の如き、何れも此點には深く心を用ひ、常に皇德をして庶民に光被せしむることを勵めつつあつたことは、明治初期の歴史の證明するところである。

× × ×

元田永孚は、明治天皇の御盛德を玉成し奉るに就て、最も忠誠を效したる一人であるが、彼自身又た常に「篤誠君を愛す」と云つて、其通りに實行してゐた。比ろ産業界の指導者を宮中に召させられ、謁を賜はりたるが如きは、寔とに有難き思召にして。侍從を日本全國は愚か、海外の方面にまで御差遣在らせられ、其の疾苦を問はせ給うたる思召は、我等に於いて恐懼感激、之に過ぐるものはない。

されば我が國民學校の教育は勿論、中等教育に於いても、青年教育に於いても、我等の日の御子である　天皇を仰ぎ奉ると同時に、我等の倫理的國家の大なる父母として、敬愛し奉ることを了解せしめねばならぬ。楠木正行がその一族と共に、吉野行宮に參じ、恭しく主上の御簾を拜し奉り、然る後鏃もて如意輪堂の扉に、

かへらじとかねて思へば梓弓、なき數に入る名をぞとどむる

と題し、高師直との決戰に出掛けたる物語りは、如何に我等を感激せしむるものあるか。苟くも此の感激が、永久に存するからには、我國は如何なる場合たりとも、他に後れをとる可き筈は無い。要するに尊皇は卽ち愛皇にして、愛皇は卽ち尊皇である。

(第二)　大東亞氣分

德川家光が奉行を長崎に派遣するに際し、「德川家の存亡は、國内の事である。長崎は外國人と相接するの地にして、一寸の土地たりとも彼等に奪はるれば、國辱である。ゆめ油斷するな」と誡めた。然るに今まや我が國境は長崎に非ず、函館に非ず、北は黑

龍江畔より、南は印度洋外に進出してゐる。其間に於いて滿洲は言ふも更らなり、中國や、タイ國や、佛印は皆な我が與國である。而して香港、ビルマ、マライ、ジャワ、セレベス、スマトラ、ニューギニア等の各地域は、皆な我が攻略したる所である。

如上の諸國を加へて、大東亞圈内と稱してゐる。注文通りにすれば、印度、濠洲も、當然此の圈内に加はる可きであるが、今日では印度は未だ獨立の決心を斷行せず、濠洲は尙ほ英米の間に依違してゐる。

× × ×

大東亞氣分とは、我が日本國民が、此の大東亞の世話役として、日本が當然立つてその責任を負ふ其の責任觀念である。英國の文士キップリングは「白人の重荷」抔と稱して、植民地を支配することを當然の義務と云ひ、賴みもせぬのに恩を著せてゐたが。我が皇國は其の白人より—卽ちアングロ・サクソン人より—大東亞を解放せんが爲め、一切の犧牲を拂つて、今まや此の戰爭を遂行しつつある。

されば我が國民は此の大東亞圈内に就ては、これを他所事とせず、多大の關心を有た

ねばならぬ。卽ち大島島に敵機が來襲したるは、恰も我が東京灣口の大島に敵機が來襲したると同樣に關心を有ち。ビルマやタイ國に、敵の爆彈が投下されたるは、恰も我が大阪や名古屋に爆彈が投下されたると同樣の關心を有たねばならぬ。而して東亞共榮圈內の諸國民、諸民族に對しても、皆な我が親類視し、緣者視し、特別の情愛と、好意とを有たねばならぬ。これが卽ち大東亞氣分である。別語で云へば、大アジア主義の實踐である。

× × ×

我等は固より大東亞の物的資源を開發して、之を大東亞戰爭の資源とせねばならぬ。これは日本の爲めばかりでなく、固より大東亞そのものの爲めである。然も物的資源の開發と同時に、又た人的資源の開發にも心を用ゐねばならぬ。人的資源の開發とは、大東亞諸民族をして、所謂る大東亞の本源に立還り、其の眞面目を表現せしむることである。卽ち彼等を精神的に誘導して、善且つ美なる東亞人たらしめねばならぬ。それに就ては我國が主として東亞文化の指導的任務を果たさねばならぬ。

× × ×

中國は儒敎及び佛敎に於いて、本來我國と相ひ通ずるものがある。タイ國、佛印、ビルマ諸邦に於ては、小乘、大乘の差別があるが、佛敎に於いて自から相ひ通ずるものがある。其他の諸邦に於いては、回敎徒最も勢力あるが、回敎徒の本義たる淸眞の點に於いては、自から我が神ながらの道に相ひ通ずる點が鮮くない。卽ちフィリッピンに於けるキリスト敎徒の如きも、我國のキリスト敎徒と聲息相ひ通ずるものがある。されば文化的に彼等を啓發し、精神的に彼等を誘導し、心靈的に彼等を融合するの道は、自から開けてゐる。要は只だこれを最も效果的に幸用すると、否とにあるのみ。

然も我等は此際油斷してはならない。英米の敵は東西より一掃し去りたりとするも、それは單だ物的の敵である。アングロ・サクソン人は、二百年來其の勢力を東亞に扶植した。草さへもそれを刈り去れば、明春は又た元の如く根から生え出づる。況んや彼等の軍隊を追拂ひ、彼等の役人や商賈人を追拂ひたりとて、彼等が二百年來扶植したる勢力が、同時に追拂はるるものではない。而して其の勢力は、概して二個の方面に殘存し

てゐる。第一はアングロ・サクソン人に對する尊敬と恐怖の念である。第二はアングロ・サクソン人の勢力下に扶植したる、アングロ・サクソン化したる思想と、習慣とである。別言すれば自由權利の思想と、物質的享樂氣分とである。されば我等は敵の隻影を見ずとて、これにて忽ち我等の理想通りに、大東亞共榮圈の鐵壁が築かれたと思ふ可きではない。物質的には兎も角も、精神的には滿地皆な敵といふ程で無きも、殆んどそれに幾しと思はねばならぬ。玆に我々の心配があり、從つて玆に我々の努力が拂はれねばならぬ。

× × ×

我等は東亞共榮圈内の諸國及び諸民族に對して、徒らに目前の小利を事とせず、百年の大計より、これに善處せねばならぬ。百年戰爭をするには、百年の大計が當然必要である。それには善政を布き、秩序を嚴持し、治安を確保し、公正と、清廉と、親切とを以て之に臨まねばならぬ。而して東京を東亞共榮圈の凡有る經濟的、物質的中心たらしむるばかりでなく、凡有る文化の中心たらしめ、東亞各國諸民族が、皆な文化の眞源を

東京に向つて求む可き設備をせねばならぬ。此の如くにして、始めて東亞共榮圈内が打つて一丸となり、進んで以て世界新秩序の設立に、貢献する事が出來る。東亞共榮圈の建立には、力が最も必要だ。然もそれ以外に、圈内の諸國、諸民族を、心から悅服せしめ、心から敬服せしめる必要がある。

(第三) 世界的新秩序 (一)

或る外國新聞記者は、予に向つて曰く、

日本が南方の資源を占領し、豐富の國となる曉には、剛健質實の日本人氣質も、何時かは變化して、古のローマの覆轍を踏む心配は無き乎。

と。予曰く、

普通の國家なれば、其の心配は一應尤もである。けれども日本の國體は、日本人をして斯かる危險より脫せしむる事が出來る。それは日本では總てのものを　天皇に歸一す。日本の國體では、所謂る「萬古仰ニ天皇一」ものである。故に日本が富强となった

とて、それは國家が富强となつたものにして、富强の國家は　天皇が統治し給ふところのものである。個人は決して其の富强を、自己の利益や慾望の爲めに濫用すべきものではない。卽ち日本では、世界各國が、幾百年を經ても成就することの出來ない版籍奉還、廢藩置縣を、一朝にして擧行する事が出來た。それは卽ち各個の日本人が、普天の下は皇土であり、率土の濱は皇臣であるといふ、其の一大理念より發したるものである。予は實に斯く確信する者である。故に我が同胞が苟くもこの國體の本義に順由して、皇民たる本務を忘れざる限りは、世界の富を日本に集めても、決して其富の爲めに煩はさるる心配は無いと思ふ。況んや我等は其富を、日本に集むるに非ずして、これを世界の爲めに貢獻せんとするに於いてをやだ。

と。

×　×　×

今や日本は皇室を以て日本の樞軸と爲し、日本を以て東亞の樞軸と爲し、東亞を以て世界新秩序の一大動力と爲し、我が與國たる獨逸、伊太利諸國と提携して、世界新秩序

の建立に從事す。その先決問題としては、何よりも米英擊滅である。米英の勢力が世界に殘存する間は、到底新秩序の建立は期待することが出來ぬ。何となれば新秩序の一大眼目は、米英固有の個人的權利思想を擊滅して、これに代ふるに人類奉仕的義務の思想を以てするにあるからだ。

×　×　×

然るに世間では、今ま尙ほ英米の勢力を過大に評價し、英米人が世界に向つて宣傳するところの大法螺を、其儘盲信する者もあり。然らざる迄も、尙ほ英米を怖るる、虎の如きものがある。我等は決して英米與みし易しと云ふではない。併し彼等の勢力は、物的勢力にして、然も其の物的以外に、精神的勢力を以てせんとするも、彼等は殆んど其の中樞理念の持合せが無い。百年前英國文人の雄マシウ・アーノルドは、英人を評し、「其の中流階級は物質化し、勞働階級は動物化す」と云つた。英國も英國らしき氣分が、ヴイクトリア朝末期までは、聊か其の流風餘韻が存してゐたが、今日ではそれも殆んど消え失せて、唯だ最惡なる自由享樂主義が、社會を支配するに至つた。而して其の最も大

なる表現は、前年エドワード八世退位事件であつた。彼エドワード八世は、既婚の婦人と不自然の關係を結び、其の爲めに帝冠を拋ち去つた。此の如く人君の天職を忘れ、眼前の享樂を恣にせんとするに至つては、實に沙汰の限りである。從來英國が植民地を繫ぐ紐帶は、唯だ「帝冠あるのみ」と云つたが、玆に至つて其の帝冠の輕きは、破れたる麥藁帽子程でもなかつた。英大帝國の分解は、此の如くにして必然の勢を示し來つた。

× × ×

英國は由來他人の褌にて相撲を取る事を以て、其の世界政策とした。而して日露戰役以後、日本が英國の番犬たる役目を果たしたるを見て、日本を振捨てて米國の軍門に降つた。これが卽ち英國が自主獨立の國たる面目を失つて、曾つて己の屬邦であつた米國の屬邦となるの第一歩であつた。今日の英國は、もがいても、泣いても、最早や英國首相チャーチルが自から「我はルーズヴエルトの副官なり」と明言した通りの役目を果たす外は無いこととなつた。

(第四) 世界的新秩序 (二)

米國に至つては、日本を九十日間の戰爭で叩き附けて仕舞ふと豪語したが、今日は果して其の豪語が、如何なる實效を齎らし來りたる乎。彼等は今ま尙ほ其の物的資源を恃みとして、無數の飛行機、無數の軍艦、無數の巨砲、總て其のドルにて購求し得可き凡有るものを傾け來つて、我を壓倒せんとするも、顧つて其の人的資源を見れば、頗る薄弱に堪へざるものがある。米國の人口は、一億五千万と稱する。其の一億五千万中には、世界の凡有る人種が相ひ錯綜し、銘々獨逸人は獨逸人、伊太利人は伊太利人、黑人は黑人、其他和蘭、スエーデン、ノールウエー等、各邦の人種皆なそれ〴〵割據してゐる。

× × ×

謂はゞ一億五千万の國民は、皆な一億五千万の心ありと云つても差支ない。固よりこれが一朝にして、潰亂するものと思はれない。何時彼等も所謂るアメリカ魂を以て、我に立向ふかも知れぬ。併し彼等が何の爲めに奮戰、決鬪する乎。誰が爲めに一命を擲つ

乎。大なる償金と、大なる報酬の外は、何物も無いではない乎。昔フランクリンは「自由の棲む所、これ吾が郷里」と云つた。然も米國の何處に自由は在りや。若し在りとすればカポネー一派の大破落戸の仲間乎、然らざればウォール街の投機商の仲間乎、石油王、鋼鐵王などの仲間乎、其の數者に過ぎない。米國には富と暴力以外に、自由は無い。斯かる國家に於いて、其の國民に向つて、最大、最高の愛國心を要求することは、難事と云はんよりも、全く不可能と云はねばならぬ。

× × ×

我等は決して英米二國を侮るものではない。彼等が日本を「泥にて作りたる兩脚を持つ人形」と評したる如く、我等もまた彼等を張り子の虎とか、布にて作りたる大蛇と見るものではない。併し彼等は自由とか、民主とか云ふことを、その大なる標準として、それを合ひ言葉として、國民の元氣を激勵せんとするも、それは全く空念佛に過ぎない一事は、我等は明らかにこれを斷言するに憚らない。

假令彼等が獨逸に倣つて、遲蒔きながら統制的國家の體裁を備へて、對抗し來たるも、

魂無き戰時體制では、何の役にも立たない。我等は英米を侮らないが、決して怖れない。彼等が我等に模して、我等と來り戰ふ場合には、更らに彼等より以上の精神力を發揮して、之を撃滅し得ることは、斷じて疑ひを容れない。

× × ×

曾つて日本古典の研究者として、世界的評判あるチエンバーレンは「日本の新宗教」と題し、「忠君愛國の理念は、維新の元老等が國民を指導する爲めに製作したるものである」と云つた。彼は「古事記」の飜譯者であり、萬葉集の研究者である。若し彼が萬葉集を文字通りに解釋したらんには、忠君愛國の思想は、維新の元老が製造したるものでなく、我が肇國以來の思想にして、萬葉の歌人等は、自然に口を衝いて其の精神を洩らし來たつたことを知るに餘りあつたであらう。

× × ×

要するに英米二國は、此の如く見當違ひを以て、我等を評價してゐる。これ彼等自身が、此の如き高尚なる理念を理解するの能力不足したる爲めと云はねばならぬ。曾つて

ロンドン・タイムスは、明治天皇崩御を以て、日本が下り坂となる分水嶺であると云つた。これは大正より昭和の初期までは、稍〻此の豫言を事實ならしめんとする如き事相も少くなかつた。然も一度我が日本國民が、本來の日本精神に立還つた今日に於いては、見事是等の豫言を吹き飛ばし去つたばかりでなく、實に日本は、明治天皇の貽し給ひたる盛德大業を、更らに東亞的に、更らに世界的に恢宏しつつあるを見る。

苟くも我等にして自から不敗の地に立ち、東亞共榮圏にして又た不敗の地に立たば、アングロ・サクソン人を相手として、假令其の戰爭が百年繼續するも、決して憂ひとするに足らない。我等は必らず其の目的を完遂するに相違無い。但だそれには大なる考慮と、大なる自省と、大なる努力とが必要である。蓋し必勝の算は、まづ不敗の地を占むるより來る。（昭和十七年十二月二十六日）（完）

物心兩面に於ける米英撃滅の戰爭

（第一）戰爭目的の三階段

我等は何の爲めに戰ひつつある乎。今更ら斯かる愚問を發する必要はあるまい。併し鹿を追ふの獵師は山を見ずとかや。我等が餘りに戰爭に熱中すればする程、却つて其の本來の目的を忘却するが如き虞れ無しとしない。されば我々は常に斯かる問題を高く掲げ、深く考へ、遠く慮り、切に行ふ事を忘れてはならぬ。これ我が當局が毎月大詔渙發の當日、卽ち月の八日を以て其の記念日とし、國民をして自から警醒せしむる所以であらう。我等は之を大にしては、世界に向つて戰爭の目的を明らかにして、此の戰爭の已む可からざる所以を强調し。之を密にしては自己の良心に問ひ、皇國臣民の本分として、全心全力を之に向つて擲たねばならぬ事を覺悟する必要がある。

×　　×　　×

今更ら云ふまでも無いが、大東亞戰爭の目的には三階段がある。（第一）皇國日本自衛の爲めである。（第二）東亞諸民族解放の爲めである。（第三）世界新秩序建設の爲めである。而してこの三者は、個々別々のものでなく、之を水平に見れば三位一體であり、之を立體的に見れば三階一貫である。

今ま茲に改めて戰爭の起因などを穿鑿する必要はあるまい。併し我等は決して自から好んで戰爭の渦中に投じたものではない。出來得可くんば平和的に、凡有る葛藤を解決し、その平和の爲めには、妥協し得可き極度、交讓し得可き最後までも之を務めた。然るに彼れ米國は―その後背には勿論英國も存在してゐる―我等を餘儀無く戰爭に追込んだ。

その顚末は繰り返すまでもない。要するに彼等は日本を罐詰にし、全く呼吸も出來ぬまでに之を密封せんとした。最初はA・B・C・Dの經濟的包圍陣を作つて我等を干物にせんと欲し。次には武力的壓迫を加へて、戰はずして我等を屈服せしめんとした。而して最後には我に向つて、支那よりは撤兵せよ。滿洲帝國も認めない。南京政府も認め

ない。認むるものは唯だ重慶政府あるのみだ。三國同盟は放棄せよ。而して九國條約に復歸せよと云ふに至つた。

×　　×　　×

事茲に至れば、如何なる米英崇拜者も、最早や斷念するの外はあるまい。況んや常識ある皇國男兒に於いてをや。然も我等をして慨然起たしめたるものは、單に我が日本の生死存亡の問題のみでは無い。我が東亞十一億の民族の生死存亡の問題である。我等にして一度米英の命令に屈服せん歟、十一億の東亞諸民族は、恐らくは再び天日を見るの機會はあるまい。更らにこれを世界的に見れば、今まやアングロ・サクソンの横暴は、世界廿餘億の人類を擧げて―恰も三億餘の印度人に於けるが如く―その奴隷とせんとしつつある。若し彼等の思ふ通りに一任せん歟、世界は全く最暗黑となり、生ける地獄を地上に展開するに至る事は、斷じて疑ひを容れない。我等の興國たる獨逸、伊太利が、歐羅巴に於いてこのアングロ・サクソン人の世界制覇の野望に對し、その勝敗の運命を一擲に爭ふに至つた所以は、決して偶然ではない。

以上の如く、我等の戰爭目的は、自國に始まり、東亞に中し、世界に及ぶもので、この三階段は、我が皇道日本の大義を以て一貫してゐる。さればこの戰爭を以て、ゴムや、錫や、石油や、若しくは麻や、砂糖や、米や、材木やを得んが爲めの戰爭と見るが如きは、全く以て戰爭を冒瀆するものである。これ等は戰爭の結果でこそあれ、決して目的でない。

(第二) 所謂る米英の戰爭目的

我等は米英兩國の執權者であるルーズヴエルトやチャーチルに向つて、敢へて問ふ。

『卿等は如何なる理由を以て、日本に向つて戰爭を强要したる乎』と。彼等の所謂る戰爭の目的とは何物である乎。凡そ世界に於ける言論の雄なるものは、アングロ・サクソン人に若くはない。彼等は如何なる事にも相當の理窟を付くる長技を有する。所謂る泥坊にも三分の理窟ありとは彼等のことだ。然るに彼等は戰爭目的に就て、未だ何等の確乎たる理由も示さず、道理も明らかにせず、敵に對するばかりでなく、自國民をして謂

ふ所を知る能はざらしむるが如きは、實に近頃以て奇怪千萬の事と云はねばならぬ。

× × ×

勿論彼等は全く沈默したと云ふではない。昭和十六年八月九日より十一日に亘る大西洋上、今はマライ海中の藻屑となりたる英戰艦プリンス・オブ・ウエールズ艦上に於ける、ルーズヴエルトとチャーチルの第一次會談に、所謂る大西洋憲章八項目を宣言し、世界に向つて戰後の經綸を聲明した。併し之は恰もウイルソンが第一次世界大戰に於いて示したる十四個條の項目同樣、取らぬ狸の皮算用で、何等それが物になる可き筈はない。全くの空手形で、自國民さへも夢中夢を聽く感を爲してゐる。

爾後彼等が戰爭目的に就て語つたところのものは、唯だ漠然たる諸民族の解放とか、若しくは人種平等の確立とか、凡そ實際と最も緣遠き問題を掲げ來つて、一時を瞞化せんとするに過ぎない。若し諸民族の解放、人種平等の確立が實際問題として取扱はるるならば、何故にアメリカ合衆國內の黑人種一千六百萬人に向つて之を使用せざる乎。何故に之を印度三億の人民に向つて適用せざる乎。脚下の現實を忘れて、架空の約束をな

すが如きは、彼等の十八番で、今更ら珍しき事でもないが、但だ餘りに白々しくて、眞面目に之を論評する事が出來ない。特にルーズヴエルトが此の戰爭を目して『生き殘る爲めの戰爭』と名付けたるが如きは、言語道斷である。日本を罐詰にせねば、アメリカが滅亡すると云ふ理由は、何處を探しても在る筈はない。

× × ×

元來彼等は自由と云ひ、民主と云ふが、彼等は果して自由國である乎。果して民主國である乎。英米は世界に於ける自由主義の本家本元と稱せられ、恰も英國人自から自由主義の問屋を以て任じてゐる。されど識者は常に云ふ、『英國には自由がある。併し其の自由は唯だ少數の大地主階級、所謂るゼントルマンと稱せらるる階級である。彼等は凡有る自由を有つてゐるが、彼等以外は英國では誰も自由を有つてゐない』と。史家は曰く、『佛蘭西では國王が政權を握り、西班牙では僧侶が政權を握り、英國では紳士階級が政權を握る。曾つてジョン王が大憲章に調印するや、自ら嘆じて曰く、予が上には二十五人の上王が出來た』と。二十五人の上王と云ふは、卽ちジョン王を强要して、大憲章

に調印せしめ、た二十五人の委員會が、凡有る政治の諮問機關となりたる爲めである。今まや英國の政權は、土地の所有者より、工業革命に依つて發生したる大資本家の手に移り、更らに轉じてその幾分は一部勞働者の手に移りつつあるも、英國自身が自由國でないことだけは、明白である。

米國に於いては黃金萬能で、黃金以外には、何處に行つても自由なるものは見出されない。

× × ×

今ま假りに我等が米英と戰つて敗北したりとし、平和條約を締結せんとする時には、彼等が如何なる條約を我等に向つて課する乎。それは明白でない。然も昨年五月三十日、米國のメモリアル・デー（我が招魂祭に比する）に際し、國務次官サムナー・ウエルズの演說によれば、彼は戰爭目的として、左記の如く羅列してゐる。

（一）戰爭責任者たる個人、集團及び國民の處罰。

（二）戰後相當長期に亘り休戰期間を設け、その間に侵略國の軍備撤廢を行ふこと。

(三) 平和保持の永久的機構確立に至るまで、米國及びその與國に於いて、國際警察力を維持行使すること。

(四) 戰後、經濟問題、社會問題の處理を了したる上、米國とその與國を基礎とする國際組織を設け、徐ろに平和の最終條件を決定すること。

(五) 戰後の世界秩序建設に於いては、米國はその指導者たるべきこと。

(六) 汎米機構はこれを繼續すること。(以上來栖大使の報告に據る)

果して之が實行せられたとしたならば、我等は第一次世界大戰後に於ける獨逸に百倍するだけの屈辱と苦痛とを負擔せねばならぬことは、明白ではない乎。この一事に徵しても、我等は是非とも勝ち拔かねばならぬ。なほ最近同人の演說したる所によれば「我々米國人は自己の自由と獨立を保持せん爲めに戰ひ、この世界を暴力と不信行爲を以て支配し得ると考へた一陣の壓制者を敗北させる爲めに戰ふ」と明言した。然も何人か敢て自から進んで米國の自由と獨立とを破壞せんとする者がゐる乎。その破壞者は米國自身である。彼等自から世界に火を付け廻つて、世界を禍亂の中に陷れたものである。

(第三) アングロ・サクソン三個の敵

アングロ・サクソンの常習として、恒に己より優さる者、若しくは優さらんとする者、或は己に肩隨する者を敵として、其頭を叩くことを專務とする癖がある。これは固より計畫的である可き筈だが、餘りに習性となつて、今日は殆んど本能的と見ても差支あるまい。現代に於いて、彼れ米英二國が敵としてゐるものは、第一が獨逸である。第二が日本である。第三がソ聯である。其の以前では卽ち露西亞帝國であつた。

第一の敵たる獨逸は、第一次世界大戰で遂ひに遺り付けた。其の戰場は專ら佛蘭西及び白耳義に限り、英國の內地には、何等の損害も及ぼさなかつた。併しこれが爲めに從來世界の債權者たる英國は、債務者となり、世界財政制覇の權を、敢へなくもロンドンより、ニューヨークに奪ひ去られた。第一次世界大戰に際し、金儲けをしたのは米國であり、英國は所謂る戰勝者の悲哀を感ずるの已むなきに至つた。第二の敵たる日本は、曾つて日英同盟を結び、其の結果、日本をして露國と戰はしめ、兩虎共に或る程度まで

傷つき、アングロ・サクソンをして其の目的を達せしめた。併し嘗て日本は第一次世界戰爭と共に、頭首を擡げ來たり、これを叩き付ける爲めに、米英共同して、大正十一年二月のワシントン會議に於いて、其の目的を果した。第三の敵たるソ聯は、第一次世界大戰後、これを撲滅する爲めに、凡有る手段方法を講じたが、遂ひに其の目的を達する能はずして手を引いた。

× × ×

扨も耐來世界はアングロ・サクソンの希望通りに回轉せずして、其の反對に逆轉した。即ち叩き付けられたる獨逸は復興した。これを復興さするには、彼れアングロ・サクソンも亦た與つて力があつた。それは英國の同盟國たる佛蘭西が、第一次世界大戰後、急に元氣を回復し、歐洲の諸小國を糾合し、自から盟主の地を占め、其の爲めに所謂るアングロ・サクソンの常習癖が出で來り、これを牽制する爲めに、遽に獨逸に向つて同情の手を伸ばした。獨逸を復興せしむるには、アングロ・サクソンの資本が物を言つてゐることは、間違ひもない。誰よりも獨逸人が之を知つてゐる。

併し獨逸はアングロ・サクソン人の豫想以上に復興した。ヒットラーなる無名の英雄が勃然として草莽の間より出で來つて、獨逸國民を率ゐ、ナチス黨の勢力は、獨逸全國を席捲するに至つて、アングロ・サクソンも漸く目を覺ました。斯くて獨逸を押へ付くる爲めに、凡有る方便、絡繰を逞しくしたが、打つ手も打つ手も、悉くヒットラー總統に先手を打たれ。嘗てはソ聯を味方に引入れ、これを以て獨逸を牽制せんと試みた。然もこれも亦た先手を打たれて、英佛兩國の使節がモスクワに乘り込み、堂々と軍事上の協定などを詮議中、何時の間にか獨ソの不戰條約は出で來つて、彼等を啞然たらしむるに至つた。

× × ×

彼等は又た日本を騙りて、窮鼠猫を食むの死地に陷れた。其の爲めに滿洲事件は出で來り、ゆくりなくも又たそれが延長して支那事變となつた。支那事變に就いてはアングロ・サクソンは相當に成功したと云はねばならぬ。何故なれば、彼等は蔣介石一族をして飼犬と爲し、彼等をして吠えるだけ日本に向つて吠えしめ、其の吠える聲を世界の輿

論と爲し、纏て世界の法廷に於いて、日本を懲罰せんと試みたからである。

併し日本たるもの何時まで斯かる惡策に惱まさるる可き。日本は其の互ひの同情者であり、互ひの理解者を、ナチス獨逸に、ファッショ伊太利に見出した。此の如くにして日獨伊三國の防共協定は出で來つたが、これが漸く軍事協定にまで進まんとする途中に於いて、獨ソ不戰條約は出で來つた。

彼等はソ聯に失ひたるところを再び日本に於いて取戻さんと欲し、盛んに日本に向つて獨逸の惡聲を放つに至つた。即ち獨逸は日本を裏切りたりなどと、あられもなき評判を立て、日獨の間に水を差し、纏ては東西の二大强國をして、互ひに相ひ反目せしめんと企てた。而して其の反目の間に、東亞に於けるアングロ・サクソンの地盤を堅確ならしめんと試みた。

然るに天は未だアングロ・サクソンのみの味方ではなく、それが又た逆轉して、却つて日獨間を近親せしめ、遂ひに昭和十六年九月、此に日獨伊の三國同盟は出で來つた。此の如く彼等が毒を以て毒を制し、敵を以て敵を打つ策略は、事毎に喰ひ違ひ、彼等を

して天道是か非かの嘆を洩らさしむるに至らしめた。

(第四) 獨ソ及び日ソの關係

併しアングロ・サクソンは、本來執拗である。粘り强きは彼等の本色である。それで日獨伊三國同盟は出で來つても、これは單だ紙の上の條約で、日本の眞心はなほアングロ・サクソンに向つてゐると自惚れた。この上は日本に向つて壓力さへ加ふれば、日本は必らず彼等の思ふ通りに屈服するに相違ないと、大早計にも勘違ひした。而してその結果が即ち昭和十六年十二月八日の米英に對する宣戰の大詔渙發となつたのである。

× × ×

アングロ・サクソンが廿餘年來、工みに工み來たりたる三個の敵は、廿餘年後の今日に於いて、その何れもが當時よりも寧ろ强大となつてはゐるが、決して弱小となつてゐない。アングロ・サクソンの豫算は事毎に外れて來た。併し今日に於いて彼等が纔かに息を吐いたのは、獨ソの戰爭である。

獨逸は固よりアングロ・サクソンを以て正面の敵としてゐる。併し獨逸はアングロ・サクソンと戰つて勝つには、先づ不敗の地を占めねばならぬと云ふ事を覺悟し、其の結果が卽ち獨ソの戰爭となつた。これが爲めに獨逸は今まや歐洲の穀倉と云はれるウクライナを手に入れた。これが爲めに獨逸は黑海の制海權を手に入れた。而して石油の產地たるコーカサスにも手を伸ばし、全く之を手中に收めたとは云はれぬが、纏て收め得る事の見込みは付いてゐる。

但だ獨逸はソ聯の勢力を聊か過小評價したが爲めに、其の戰爭も意外に長引き、且つ苦戰である。然も獨逸が早晩其の目的を達し得可きことは、我々が堅く〳〵信ずるところである。併し若し獨ソ戰爭がなかつたならば、恐らくはロンドンは旣に廢墟となつてゐたかも知れぬ。英國の爲めに尠くとも暫時の息を吐くことを得せしめたるは、ソ聯の賜物と云つても、差支あるまい。

× × ×

併し彼等の陰謀は猶ほ別に存してゐる。それは日ソの戰爭である。彼等は必らずしも

ソ聯を愛して日本を憎むではない。又た日本を愛してソ聯を憎むでもない。彼等の嫌ひから云へば、共產主義のソ聯である乎、八紘爲宇の皇國である乎、恐らくは容易に區別は出來まい。其の蛇たり、蚯蚓たることは、何れにあるかは姑らく措き、蚯蚓も嫌ひであれば、蛇も嫌ひであると云ふ類であらう。

されば彼等は常に日ソの間の惡感情を煽動し、相互の敵愾心を挑發し、出來得可くんば兩國の間に事を起さんと、常に天に祈り、地に禱り、神に祈り、惡魔に禱つて、その智慧、才覺を極めてゐる。

× × ×

如何に彼等の手が日本に於いて動きたる歟は、過去四五年間の事を回想すれば、思ひ半ばに過ぎるものがあらう。併し日本もソ聯も、英米の注文に應ずるには、餘りに賢明であつた。

自國の利害は、自國が能く之を知つてゐる。今更ら日ソ相ひ戰つたとて、兩損あつて一得無き事は、明白である。松岡元外相が、日ソ中立條約を、昭和十六年四月、モスク

ワに於いて、當時のモロトフ外相と締結したのは、寇とに時期の宜しきを得たるものと云はねばならぬ。而して其の結果は、英米の注文に外れて、今ま尙ほ兩方共にそれを堅持してゐる。

(第五) 米英側の離間中傷策を警戒せよ

要するに日本 於いては、日本の立場があり、ソ聯に於いては、ソ聯の立場がある。其の立場は決して同一ではない。併し兩國共にアングロ・サクソンの笛に踊り、歌に舞ふ程のお人好でないことだけは明白である。

× × ×

即ち最近のカサブランカ會談に於いて、ルーズヴェルトとチャーチルとが、スターリンの來會を求めて、遂ひに其望を達し得なかつたことは、世界に向つて、彼等が大失敗、大敗北を廣告したものと云はねばならぬ。

元來チャーチルは第一次世界大戰後英國の閣僚として、ソ聯退治の張本人であつた。

彼はソ聯を憎む事骨に徹してゐる。英國資本主義の代表者たるチャーチルが、共產主義のソ聯を憎むことに、決して不思議はない。それと同時に亦たルーズヴェルトも同樣である。然もチャーチルは今日に於いては、『苟くもナチス獨逸の敵ならば、惡魔とでも握手する』と明言してゐる。彼がスターリンを惡魔と思ふ事は、恐らくは昔も今も異つてゐないであらう。但だ彼等の立場が、スターリンと握手するを必須とした迄である。

併しチャーチルが握手を欲しても、スターリンは之に應じなかつた。恰もチャーチルとルーズヴェルトが、アフリカの北岸まで出掛け、此處に茶會を設けたるに、其の主客たる可きスターリンが缺席するに於いては、彼等をして呆然自失せしめたであらう。今更ら實に笑止千萬の外はない。若しスターリンにして來らば、彼等は如何なる文句を以て口說いたであらう乎。それは姑らく措き、何れにしても日ソ戰爭を挑發せしめんと試みたに相違あるまい。

併し獨逸一國さへも手に餘る敵を引受けて、更らに日本まで敵とする如き、無鐵砲なるスターリンではない。彼は甘きも、辛きも、悉く之を嚙み分けてゐる。日本に好意を

表してゐるか、否かは、立入つて訊くまでもない。併し日本と今更ら喧嘩する時期でないといふこと丈は、彼は能く承知してゐる筈である。それを引張り込まんとするは、所謂る幽靈の仲間求めの類で、これを見ても如何にアングロ・サクソンが窮地に陷つてゐるかを知るに難くないであらう。

× × ×

併しアングロ・サクソンは、決して屈托はしない。如何なる隅角に押し付けられても、身をかはすの術を知つてゐる。彼等は日本に向つては獨ソ戰爭の困難を說き、獨逸は今まや退つ引きならぬ窮境に陷りたるもので、斯かる獨逸に信賴するの危險を說いてゐる。又た獨逸に向つては、日本が經濟的に自縄自縛に陷り、如何に地團駄を踏んでも、蠻て米英に屈服するの外なきを說き、獨逸をして日本の力を疑はしめ、日本をして獨逸の力を疑はしめんと、手の限り、力の限りを盡してゐる。

又た或時には、獨逸が如何なる場合に外交上の宙返りをする歟も知れぬと云ひ、日本に向つて獨逸の信ず可からざるを說き。又た日本が南方の資源を悉く抑へ、濡手で粟を

攫み、獨逸をして徒らに戰鬪に困殺せしむるの愚なるを說き、日本に對する獨逸の猜疑心を挑發せんと試みる如き。凡有る陋劣なる手段を弄し、日本と獨逸とを離間中傷して、其の堅き同盟に龜裂を生ぜしめんとしつつある。

斯かる手段は日本に於いても、獨逸に於いても、夙に之を看破したるところで、我等は今さ茲にルーズヴエルトやチャーチルの徒に向つて、餘計なる中傷離間は、之を中止した方が寧ろ賢明であるといふことを忠告して置く。

× × ×

而してアングロ・サクソンの魔手は、先づ伊太利に向つて動いた。彼等は伊太利を獨逸より引離し、獨逸をして歐洲に孤立せしめんと企ててゐる。賢明なるムッソリーニ首相は、先づ伊太利の戰時狀態を强化す可く、內閣の改造を斷行し、之に向つて雄辯なる返事を與へてゐる。伊太利はムッソリーニ首相の存在する限り、三國同盟より離脫するものではないと。

我等の日獨伊三國同盟は、斷然當初の目的たる世界新秩序の設定の爲めに、此の戰爭

を完遂せしめねばならぬ。然も之を完遂するは、生やさしき事ではない。獨逸、伊太利兩國に於いては、既に禁酒令さへ斷行して、戰時狀態を强化しつつある。されば日本は更らに緊張を加へて、國民の總てが皆な悉く第一線に出でて活躍するの心を以て、之に對應せねばならぬ。我等は茲に繰返して云ふ。日本の戰爭目的は、皇國の自衛、東亞の解放、世界の新秩序と三段階を一貫してゐる。之を完遂するは決して尋常一樣のことではない。但だ斷じて行へば鬼神も之を避くるの覺悟を以て精進せねばならぬ。（昭和十八年二月十日）

昭和十九年二月二十三日印刷
昭和十九年二月二十八日發行
昭和二十年六月十日再版印刷發行

(許)定價金貳圓貳拾錢
產定番號一ノ六六六智

著者　德富猪一郎

發行者　東京都神田區錦町一丁目十六番地
株式會社明治書院
取締役社長　森下松衛

印刷所　東京都神田區三崎町二丁目一番地
明章印刷所
代表者　鈴木覺一
(東京九八三)

發行所　東京都神田區錦町
一丁目十六番地
株式會社明治書院
日本出版會々員番號二〇〇三八番

配給元　東京都神田區淡路町
二丁目九番地
日本出版配給統制株式會社

出版會承認
う180025號
2,000部

不許複製

(所本製上水・本製)

INTERNATIONAL PROSECUTION SECTION

Doc. No. 3076 Date: 8 JULY '47

ANALYSIS OF DOCUMENTARY EVIDENCE

DESCRIPTION OF ATTACHED DOCUMENT

Title and Nature: Booklet, "Certain Victory for the Imperial Land!" (KOKOKU HISSHO RON) by TOKUTOMI, Soho (Iichiro)

Date: Feb.1944 Original (x) Copy ( ) Language:Japanese

Has it been translated? Yes ( ) No (x)
Has it been photostated? Yes ( ) No (x)

LOCATION OF ORIGINAL
Document Division

SOURCE OF ORIGINAL
Publishers

PERSONS IMPLICATED
TOKUTOMI, Iichiro, (or SOHO)

CRIMES OR PHASE TO WHICH DOCUMENT APPLICABLE:
Propaganda

SUMMARY OF RELEVANT POINTS

TOKUTOMI's theme is that America forced Japan into the war, that she is eager for world conquest, and that further, in this drive, the British Empire will be swallowed up as well.

A few typical points:

The author warns against the Japanese evil custom of worshipping America and Britain, and as for the United States, he argues that her pressure upon Japan by cutting off supply of materials caused Japanese repulsion which led both countries to warfare. (pp 37-40) The True Character of Anglo-Saxon

In a chapter entitled, "The True Character of Anglo-Saxon," he analizes the racial character of the Anglo-Saxon, refers to Byron, Erasmus, Frederick the Great, Parmerstone, Benjamin Franklin, Goethe, Thomas Jefferson, Kant, Ruter, and George Washington, and bitterly criticizes the Anglo-Saxon race and declares that they are of piratic character.

Banned books now property of IPS

In the chapter of "The Past, Present and Future of the Imperial Rescript (the Declaration of War)", TOKUTOMI says as follows, under the title of "Our Crusade":

"Judging from the records of NOMURA, KURUSU and Roberts, the course of events exactly endorses my repeated statement that this war was a self-defense to us, and a forced one. It is not only a war for a righteous cause, but a crusade which will cure the billion people in East Asia of their diseases and emancipate them from the White-man's fetters" (p 221)

~~Doc. No. 3076~~

Analyst: WH Wagner

INTERNATIONAL PROSECUTION SECTION

Doc. No. 3076 Date 8 July '47

ANALYSIS OF DOCUMENTARY EVIDENCE

DESCRIPTION OF ATTACHED DOCUMENT

Title and Nature: Booklet "Certain Victory for the Imperial Land!" (KŌKOKU HISSHŌ RON), by TOKUTOMI, Sōhō (Iichiro).

Date: Feb 1944 Original (X) Copy ( ) Language: Japanese

Has it been translated? Yes ( ) No (X)

Has it been photostated? Yes ( ) No (X)

LOCATION OF ORIGINAL

Doc Div —

SOURCE OF ORIGINAL: ~~[illegible]~~ Publishers —

PERSONS IMPLICATED:

TOKUTOMI, Iichiro, (or Sōhō).

CRIMES OR PHASE TO WHICH DOCUMENT APPLICABLE:

Propaganda —

SUMMARY OF RELEVANT POINTS

TOKUTOMI's theme is ~~[illegible]~~ that America forced Japan into the war, that she is eager for world conquest, and that further, in this drive, the British Empire will be swallowed up as well.

a few typical ~~prints~~ points:

(Typical please see bracketed portions in notes).

Analyst: [illegible]. Doc. No. 3076 —

Proj. No. 318
Item No. 14

Scanned by
T.R. TOMISHIGE,
Rm 363.
3 July, 1947.

~~CERTAIN VICTOTRY OF JAPAN~~
(KĀKOKU HISSHŌ RON)

Written by TOKUTOMI, Sohō Iichiro,
a defense witness.

This book was published on February 28th, 1944. But, according to the author, he dictated it during the period from the end of 1942 to August of 1943. Therefore, it was written in one year to one year and nine months after the outbreak of Pacific War.

The contents ~~are~~ consist~~ed~~ of Part I. Japan and the Political Change in Italy, Part II. Analysis of Our Enemies, and Part III. Enhancement of National Spirit.

PART I. JAPAN AND THE POLITICAL CHANGE IN ITALY.

TOKUTOMI sympathizes with Moussolini's failure, and praises the fact that no one in Italy entertains a hope to conclude peace with the anti-Axis powers. But, Japan, depending upon her own power, will not be

affected in any way on her national policy by the political Change in Italy, concludes the author. (p. 17, Chapter III, Priority Principle in National Policy)

PART II. ANALYSIS OF OUR ENEMIES.

The author warns against the Japanese evil custom of worshipping America and Britain, and as for the United States, he argues that her pressure upon Japan by cutting off supply of materials caused Japanese repulsion which led both countries to warfare. (p.p. 37-40. The True Character of Anglo-Saxon)

As for Britain, he describes the history of contest for rights between kings and people, and shouts out that this is the notorious Parliamental politics of Britain. And he states that the form of government in which the Emperor is the central figure is an ideal political system. (p.p. 48-52)

In a chapter entitled "The True Character of Anglo-Saxon," he analizes the racial character of Anglo-Saxon, refers to Byron, Erasmus, Frederick

the Great, Parmerstone, Benjamin Franklin, Goethe, Thomas Jefferson, Kant, Ruter and George Washington, bitterly criticizes Anglo-Saxon race and declares that they are of piratic character. (p. 61, Section VIII. Consistent Piratic Character. p. 65, Section IX. British Constitutional Government Led By Bribery All Through Its Life. p. 69, Section X. Quit The Omnipotence Of Matter.

In the chapter of "A Great Tragedy in The Universal History," Section I, "Cause And Effect of Ultra-Piracy," TOKUTOMI says ——

"If there should be a great tragedy in the present age, it is the fact that the Empire of Great Britain is collapsing by itself. Yet, few people notices the great tragedy developing within their sight, regardless of whether he is an enemy or an ally, because people are taken up by business in these eventful days."

He emphasizes the necessity of ~~the~~ natural fall of British Empire, and gives this conclusion

as follows:

The enemy of British Empire is neither Japan, nor Germany, nor Italy, nor France, nor the Soviet Union, but the (enemy) is its own colonies; viz., Canada, Australia and India. It can be endured still. The enemy who is trying to swallow up British Empire today, or who has already half swallowed it up is the United States of America.

(p.p. 95 - 105)

Further, he gives a historical analysis of Britain in the following sections.

Section 4. Idealless Britain (p. 105)

Section 5. Political Arguments in Britain (p.107)

Section 6. Britishers Leave Soil and Religion (p. 114)

Section 7. Party Politics Ruin the Empire (p. 122)

Section 8. Academic Arguments Ruin the Empire (p. 129)

Section 9. Ireland — A Cancer of Britain (p. 133)

Section 10. Crumble of the Colonies (p. 136)

Section 11. Monarchy in Britain (p. 143)

Section 12. Individualism of Monarchs (p. 150)

In "the Additional Comment on British Tragedy," he criticises the unpreparedness of Britain under the following titles;

Jewish Peril (p. 161)

English Literature and the Rise and Fall of Britain. (p. 177)

Britain in Self-Intoxication (p. 193)

Too Drunk to Beware (signifying that Britain was unconcerned over Germany's retaliation) (p. 200)

and he concludes as follows:

"Britain is now at the end of its resources, and accepted unconditional surrender to the United States. Before bowing to Axis Powers, it bowed to its allied Power — America. We must be cautious and take it for a lesson rather than to feel sorry for Britain."

PART III. ENHANCEMENT OF NATIONAL SPIRIT.

Mostly criticisms on current events are compiled in this part.

In "A Great achievement of God and Men," he praises the Japanese Emperor for being diligent on his duty and narrates how eagerly the successive emperors encouraged their people in time of national calamity, and how ardently they prayed for divine protection. ~~Here~~, TOKUTOMI preaches that the emperor is a living God, that loyalty to the emperor is patriotism, and that the warfare of today is not only a total war for the Japanese nation but a war fought by the combined forces of the Japanese nation and her ancesters' souls. (p.p. 211 – 215)

In the chapter of "The Past, Present and Future of the Imperial Rescript (the Declaration of War)", TOKUTOMI says as follows, under the title of "Our Crusade":

"Judging from the records of the Ambassadors NOMURA, and KURUSU and Roberto, the course of events exactly endorses my repeated statement that this war was a self-defense to us, and a forced one. ~~a holy righteous war~~ It is not only a war for a righteous cause, but a crusade which will cure the billion people in East Asia of their diseases and emancipate them from (White-men's) fetters" (p. 221)

In the section of "Egoism of America," he says ——

"Premier Mussolini blustered out that the present World War ~~has been~~ was germinated ~~from~~ by President Roosevelt's ambition for World conquest. It is exactly so, and I don't think there is any objection to his theory."

(p. 221)

And he continues on ——

"Roosevelt was not the enemy of Japan from the beginning. Why did he provoke the war, even dragging perfunctory Britain into it? Churchill

once said, 'The European War will be shortly disposed of. In that case, we shall deal a heavy blow to our last enemy Japan, aiding the United States.' But, to my great surprise, Roosevelt, seizing advantage of the near collapse of British Empire, aims at taking possession of its property left behind, viz., Australia, India, South Africa and all. He is indeed a snaky ally for Britain, a shadowing wolf, so to speak. The only encumbrance for him is Japan. It is Japan and Germany that stands screening against American ambition for World conquest. Particularly Japan is its present-day enemy." (p. p. 233, 234)

In a chapter entitled "On the Second New Year of the Greater East Asia War," he says—

"The United States finally came to tell us that we withdraw troops from China, that MANCHUKUO be not recognized, that NANKING government be not recognized, that CHUNGKING

government only be recognized, that Tri-Partite Pact be abandoned, and Nine-Power Treaty be revived."

Consciously or unconsciously, it appears as though he was misleading Japanese nation by this giving erroneous information about the conditions of negotiation which was going on between the two countries early in 1941.